

噛斬（かみきり）演舞

焼きポテト

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

空から降ってきて川にどぼん。

扱いの酷さに嘆き、出会った第一村人がとんでもない人物で嘆き。

どこからともなくやってきた主人公が、恋姫の世界でのんびりしたかったお話。



不定期更新

1話辺りの文字数が多いため、分割で1時間毎に投下していく方式をとっております。

分割数がいくつでも、24時までには1話分が上がる様に調整されておりますので、分割数が多いと更新初めの時間が早まったりします。ご了承ください。



目次

			3 救出活劇					2 超逃走劇			1 水中落下
その4	その3	その2	その1	その5	その4	その3	その2	その1	その3	その2	その1
80	71	62	54	51	43	34	27	22	17	9	1

			4. 善悪問答
その4	その3	その2	その1
112	104	96	89

1 水中落下 その1

美しい満月の昇る空。

世界は淡く照らされて、鬱葱とした森が怪しく浮かび上がっている。

水の流れる音が聞こえるのは、ここが川の近くだからだろう。川のせせらぎのみが聞こえる世界は、あまりにも静寂で満たされている。

どぼんと、静かな空間に水が弾ける音が突然鳴り響いた。盛大な水しぶきを上げて、緩やかな流れの水面に波紋が広がる。

(久しぶりの外がこれか、泣きそうだな)

文字通り、降って湧いた男は存外に深い川底で文句を垂れた。すぐに浮上する必要性を感じないのか、水の流れに身を任せたままで。

それは人にとってありえない行為。間違いなく死へと直結する行動。

しかし、男は静かに川底を漂いながら、何の変化もないままに光の屈折で歪んだ満月を見上げている。

男の双眸は煌めく緋色。爬虫類のような縦に細い瞳が印象的だ。

腰で交差する2本のベルトに長ズボン、更には着ているシャツとコートまで。その全

てが黒で統一され、まるで闇に紛れるような格好をしている。

(このまま流れて海まで行ってみるか？ いや、水死体と間違われるのも面倒だなあ)

男の吐いた溜め息が、泡となって川の中を流れていく。

落下地点から随分と流されたな。と思うも、見えているのは上空で歪んでいる月だけ。どれほど流されたのかなど、計る事は出来もしない。

ゆっくりと流れる途中で、適当に出っ張っている岩を男の手が掴んだ。そこから体勢を入れ替えて、岸を目指して方向転換。砂利だらけで歩き難い川底を、しっかりと足で踏みしめる。

足に力を入れれば、ざばあと水を垂れ流して、男の頭が冷たい空気に触れた。

「ああ、これは冷たい……風邪引きそう、引かないけど」

「ふむ。では、こちらに来て火に当たるといい」

不意に、水の中に佇む男へ女の声がかげられた。

凜とした良く通る声に誘われ、男は背後へと振り返る。

目に入ったのは、白い服を着て切れ長な目をした水色長髪の少女。脇には刺すことを主眼においたような、不思議な形をした赤い槍——龍牙——が置かれている。

「おお、寒空に川へ落ちてみるもんだな。なんせ、美しい女性と焚き火で暖を取れる」

「ふつ、口が上手いな」

いやいやと笑つて、男はザバザバ水を掻き分けつつ岸へと上がった。水を含んだ衣服は、普段の何倍も重くなっている。

ぎゅつと絞れば、水を垂れ流す上着。

おそらく夜が明ける頃には乾くはずだろうと適当に考えつつ、とりあえず適当な木に上着を吊るしておく。

座つたまま此方を見ている少女の対面、そこへちようど座るのに良い感じの岩を見つけて腰を下ろす。

水気を吸つた前髪を後ろへと撫で付けながら、男が浮かべる表情は笑顔だ。

ニツコリと上手に笑んで、少女へと礼の言葉を送る。

「感謝しよう。凍死は無いだろうが、このままでは風邪を引くところだった」
「気にする事は無い。困っている者を助けるのも、また旅の一環だ」

ふ、と笑う少女と共に男も笑みを濃くした。

へえ、と感心したような声が漏れるのに続くのは賛辞の言葉。

まるで、正義の味方の様だな。そう漏らした言葉に反応して、少女は一つ頷いてから躊躇う事無く肯定した。

胸を張る姿は凛々しく、言葉にも力が籠る。

「私は、この乱世を終わらせる為。そして、私が仕えるに相応しい主を求めて旅をしてい

る。言い様によつては、正義というのも正しい表現だろう」

成程と頷いた男は、笑顔を崩さず頷き返す。

外見では当たり障りのない会話をし、内側での思考。そして、それを悟られぬ為の笑顔を忘れない。

速い話が、情報収集の真つ最中というわけだ。

旅。更には焚火。乱世。主。最後に、物騒極まりない物理的な武器。会話で得た単語と、目に見える景色を統合。

短い会話と、この世界の人間にとつての常識、環境、状況、態度、立ち居振る舞い。

全ての事柄を観察し、考察する。

予測して、それを補完する情報を引き出す為の言葉を選び。新たな情報を得ては、仮定から予測を確信へと近付ける予測を導き出す。

これも全ては『見知らぬ世界へ男が何度も訪れる内に』編み出した処世術だった。

状況の把握というのは、非常に大切な物だ。それを知っているだけで、面倒事を敬遠出来る可能性はぐんと上がるのだから。

「まあ何にせよ、立派な意思は好ましい。是非貫いて、出来るなら俺も守ってくれと有難いな」

くつくつと喉を鳴らしながら笑みを濃くし、状況をアバウトに理解した所で所持品の

チエックへと移る。

手荷物は殆どない。上着の中に、ナイフ程度の刃物が二つ。

他は全部ベルトキットに入れたな、と手を腰の辺りに手を這わせて捜す。

手触りに、反応が返って来ない。

(な、まさか落としたのか)

慌てて視線を回して確認するが、やはりそこには影もない。

おそらく。否、間違いなく川を流れてしまったのだろう。これでは、回収も不可能だ。

血の気が引くような音を伴って、男の思考が停滞する。

それほど重要な物が、中に入っていたわけではない。むしろ簡易治療キットや調理道

具といった、ほとんどは彼にとっては比較的どうでもいい物ばかりだ。

しかし、しかしだ。落し物の中には、唯一にして絶対に手放してはいけない物が入っ

ていた。

二振りの剣。

間違いなく2本のベルトに固定していたはずだが、今はその姿かたちすら見当たらな

い。

「どうした?」

「ん? ああ、いや。どうやら、荷物を川に流されたらしい。きつと、落ちた時に何処か

へやったんだろうな」

脱力するように吐息を漏らす男に、少女は掛ける言葉もない。言える事といえば、残念だったなと慰めるのが限界だ。

実際、流れのある川を探しても見付かりはしないだろう。何より今は夜で、こう暗くでは見付かる物も見付かりはしない。

吐息。

「まあ、そう気を落とすな。少しくらいなら、食料を分けてやる事も出来る」

ほらと少女が出してきたのは、手に収まるほど小さな壺だった。閉められた蓋に嚴重な封がしてある辺り、何か漬け物的な食糧なのかもしれない。

が、残念な事に男の悩みは食料ではないのだ。

いや、それも重要ではある。むしろ普通の旅人が荷を無くしたとさえ、真つ先にそれを嘆いていると見ても問題はないだろう。

しかし、男にとつての普通からしてみれば少し的外れだ。

恵んでくれる行為に苦笑いしつつ、男は口を開く。

「いや、食料じゃないんだ。荷物に大事なものが2つほどあつてな。それ以外は、ぶつちやけどうでもよかつたんだが……」

何故、落ちた直後に気付かなかつたのか。そう悔やみきれない言葉を内心で吐露す

る。

どこでも見に着けていたせいで、重さを感じなくなっていたか。手に馴染んでも、これでは本末転倒だ。

自らの武器は体の一部と思えるほど使い込む。そんな持論を唱えたこともあつたが、今となつては恥ずかしい限りである。

(手足をもがれて気付かないとは、ただの間抜けだな)

出来ることなら、過去の自分を殴り殺したい気分だ。

完全なる不注意の産物。最早、言い逃れなど出来るわけもない。

いつそのこと、豆腐の角に頭をぶつけて流血してみるか？ と更に吐息を重ねる。

同時に、視線を感じて正面を向けば少女と目が合った。逸らされることなく、ジツとこちらを見る目に男は思わず身動きしてしまふ。

「俺の顔は、なにか付いているのか？」

「いや、先ほどから表情が豊かに変わるものでな。面白くて見入ってしまった」

そんなに顔へ出ているのか？ と男が自分の頬に触れてみる。しかし、当然ながらそんなことでわかるはずもない。

諦めて、逃げるように星の輝く空を見上げる。



その2

ああ、綺麗だなあと話題を逸らしたところで、今の状況は欠片も好転しなかった。

(仕方ないか……誰かが拾っている事を願って、気長に探すでしょう)

最悪、頑張れば自分でここから下流一体を搜索できるだろう。途方もない時間を対価として支払うことになるが、たったそれだけだ。

仮にも体の一部。近付けば気配くらいは察知できるし、見れば間違えることもない。時間はたっぷりあるのだから、気長にいくしかないだろう。面倒ではあるが、仕方のないことだ。

いい感じの方針が決まった所で気持ちを切り替える。目下の目的は、柔らかい布団で寝る事と適度な仕事だ。無意味に放り込まれたわけではないのだから、何かしらこの世界でするべきことがあるはず。

さての一言を転機に、とりあえずは近場の街を目指そうと男は小さく頷いてみせた。

「あー、この辺りで街はどこだろう？ 適当に流されてきたせいで、ここが何処だか微妙なんだが？」

「それなら近くに街がある。私も行くつもりだったから、陽が昇ったら案内しよう」

「おお、それは助かる」

とりあえずは腹ごしらえだな、と提案した少女が再び小さな壺を差し出して来た。

今度こそ、男に断る理由は無い。その壺を受け取り、封を剥がそうとして——そこで邪魔が入った。

2対4つの眼が向く先で、ガサガサと茂みを揺らす影が3つほど現れる。一瞬、猪の類なら取って食う事も考えたが、残念な事に影は人型だ。

いや、人でも無理をすれば食えるだろうか？ と恐ろしい思考に到った男に気付かず、3つの影は口を開く。

「お。明かりが見えたから人がいると思ったが、大当たりだな」

「ホントですね、アニキ」

影は、黄色い頭巾を身に付けた3人組。デカイのと、中くらいのと、ちっちゃいのだ。だから、思わず男は口にしてしまう。

「実に見事な大中小トリオだな」

無意識に口から漏れた言葉ではあるが、それを聞いた少女は首を傾げた。

眉根を寄せ、何か思案する様に数秒ほど目を瞑って、再び開いた時にはやはり疑念が晴れないような顔をして男を見る。

「とりお？ 聞いた事無い言葉だが？」

「ん？ ああ、3人組って意味なんだが……どうにも、言語の翻訳具合がよくないな」最後の言葉は聞こえないように注意しつつ、わざと小さな声で発言する。

意思疎通に必要な術式が、一部停止しているらしい。言語がその世界に対応した言葉へ変換されていないのだ。

誤作動と言う事もないはずだが、どういうことだろう。

多種多様な術式を掛けあわせ、殆んど完璧な言語系術式を構築しているはずなのが。

あるいは、この世界が術式の範疇から外れている可能性もある。

説明が必要な事項として頭の片隅に記憶し、表情には出さないまま男は意識を外に戻す。

「なるほど、確かに見事な大中小『とりお』だな」

男から説明を聞いて、甚く気に入った様子の子の少女は便乗した言葉を使う。

既に2人の思考からは、目の前の3人組みなど消え失せた状態だ。正直、まったく脅威に見えないのだから仕方ない。

「お前ら、状況がわかってんのか？ まあいい。とりあえず、その女と身ぐるみ置いてけや」

アニキと呼ばれた中くらいの男は、腰から剣を引き抜いて突き付ける。

それを眺めるのは、2人分の眼。色合いとしては、ただ面白くもなさそうに眺めていると言っているのが正しい状況なのだが。

何の反応も示さない相手に対して、3人組は僅かに増長した。

「さ、さっさと置いてけよ」

「アニキが置いてけつつつてんだから、さっさと置いていきやがれ！」

「兄ちゃん、まだ死にたくないだろ？ 賢く行動しようぜ」

3人組は、大小中の順番で脅しと思しき言葉を吐き出した。それを聞いても、男は「ああ、大中小の順番で喋って欲しかったな」とかの外れなことを考えているわけ。

むしろ、懸念は誤作動を起こしているのか世界に適應していないのか不明だが、とりあえず不調な術式へと向いているわけである。

出来るなら、すぐにでも本格演算に映りたい男は丁重に。且つ、極力丁寧な言葉を選びつつ言葉を3人組へと放った。

「うん、やめておくべきだな。そちら的には『うはつ、かわいい娘いるじゃん。ラッキー』とか思っているんだろうが。正直、手に負えないと思うぞ？」

手に負えないと言うのは、当然剣を向けられた瞬間から槍に手を掛けている少女のことだ。

少女と3人組を交互に見て、男は思わずため息を吐いた。

つまり、お前の方が弱いと3人組に言っているのである。

「けけけ！ 強がりやがって、膝が震えてんじやねえか？」

「げ、げ、げ」

「その辺にしといてやれ、チビ。これ以上はかわいそ——」

一步。ほんの一步踏み込もうとしたアニキという男の動きに反応して、刹那の一閃が放たれた。

否。この場合、一撃と言う方が正しいだろう。

放たれたのは陶器の蓋。男の持つ壺の蓋が、踏み込む寸前だったアニキの真横を通過し、背後の木に激突し砕け散る。

軌跡には切れた男の頬と、陶器でありながら僅かに木肌を抉った跡という2つの戦果が残っていた。

「寄るな。言っている意味がわかるな？ わかったら、手持ちの武器を置いてさっさと失せろ」

次に来るのは殺気だ。それは粘着質で、邪悪と例えるに相応しい不快感を孕んでいる。

発信源の男は左手の壺を脇へ置き、立ち上がるのと同時に上着の中の刃物を取り出した。

それは、よく手入れされたナイフだ。手持ちの武器として、普段から携帯しているただの刃物だが。月明かりを照り返して鈍い輝きを宿せば、十分な迫力を生み出す道具にもなる。

「……………」

立ち上がった男は、一言で表すなら不気味。

まるで、人では無い様な存在感を辺りへ撒き散らしている。

ただ立っている姿は、まるでバケモノ。

何故、こんな場所へと迷い込んでしまったのかという違和感だけが込み上げてくる。

居てはいけないソレが、3人組を視た。

目が合うより早く、微妙に視線を逸らす男たち。それが、どれほど戦闘において危険な行為か知っていてもそうせざるを得ない。

続く行動は、僅かな後退。反射的に、足が後ろへと下がっていた。

3人組の行動を数秒観察した男は、頷き一つで言葉を発する。

「5秒待とう。川に飛び込んで流れてくでも、森の中を逆走するでもいいから速く消えてくれ」

言葉の終わりと同時に、男は速いテンポで数字を数えだす。

その速いテンポに焦ったのは3人組だ。逃げ出せる最後のタイミングが今だと判断

した彼らは、何故か定番な「今回は見逃してやるっ!!」とかいう捨て台詞と共に森の中を逆走していった。

面白味に欠けるなあとかく男は、彼らが見えなくなったのを確認してから、逃走際に投げ捨てられた武器の数々へ視線を向ける。

「無駄にナマクラだな」

確認しなくても、それらは見ただけでわかるほどの鈍らだ。

彼らも金が無いのだろうとは思いますが、こちらだって金が必要な状態だ。襲撃は向こうが先なのだから、迷惑料として拝借しておく。

無いよりはマシ、というやつだ。最悪、鉄としてなら売れるだろう。

剣にナイフに槍。種類だけならバラエティ豊かなガラクタを、拾い集める男の背に声をかけるのは少女だった。

3人組と同様、僅かに硬直していた少女は短く息を吐いてから言葉を紡ぐ。

「借りが出来たな」

はて? と男は首を傾げる。

貸しなどいつ作ったのだろうか、と言うのが本人の意思なのだ。だが、おそらくはさっきの流れで借りを作った、と少女は思ったのだろう。

一瞬の硬直。そのうちに思考を纏めて、結論を出す。

\Rightarrow

その3

答えは、いやいやという声で出た。

「むしろ、俺は彼らを救ったつもりだったのが？ 借りも何も、あったものではないと思われ」

「何を言う。この趙子龍（ちようしりゆう）、受けた借りは返さねば気が済まん」

「いや、だから俺が貸したのはむしろあの莫迦共——ん？ ちよい待ち。今、趙子龍って言っちゃった？」

ピタリと男の思考が停止する。

聞きたくない言葉を耳にして、半ば錯乱し始めそうな脳内の均衡を保とうとした結果だ。

だが、その停止も無意味だろう。少女が胸を張り、堂々と名乗る事によって再起動せざる得ない状況下となる。

「如何にも。姓は趙（ちよう）、名は雲（うん）。字は子龍（しりゆう）と言う」

（くっ、聞き間違いであつて欲しかった。と言うか、三国志か?! 道理で、さっきの3人組は黄色い頭巾を付けていたわけだっ!!）

黄巾賊。あるいは黄巾党。

彼らとの初遭遇が、あれだけアツサリでいいのかも疑問だが。

むしろ蜀の五虎大將軍が一人、趙雲が女だったことにビックリである。というか、史実では男だったはずなのだが。

「ああ……なんか、マズイ所に来ちゃった感が拭えないな」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、こつちの話だ。気にしないでくれ。そう言えば名乗っていなかったが、俺の姓は峯（ほう）、名は？（えん）。字は戒李（かいら）だ。よろしく、趙雲殿」

「ああ、よろしく頼む。峯？殿」

趙雲に聞こえないよう吐息を漏らし、戒李は再び空へと視線を向けた。

今度は、星よりも強く光る月が視界へ入ってくる。

ああ、綺麗だなあとか現実逃避しつつ、このまま趙雲について行くと色々巻き込まれるかもしれないと密かに思う。

とりあえず、殺し殺されは面倒だから御免だ。

もし三国志の世界だというのなら、戦争へも駆り出される可能性もあるが。それもできればパスしたい。

んーと微妙に唸って、正面から視線が来ている事に気付いた。空から地上へ、視界を

戻す。

こんな場所で視線を感じる。などという話になれば、目の前にいる趙雲以外に居るはずもない。

案の定、その視線は彼女の物であり、熱烈なそれは戒李の左手へと注がれていた。

「あー、申し訳ない。蓋を壊してしまった」

戒李の左手にあるのは小さな壺。先程、3人組へ向けて投げてしまった蓋の本体である。

おそらくは、それを怒っているんだろうと思う彼の謝罪に、しかし趙雲は光の速さで答えを返す。

いや、問題ないと言う脊髄反射の声に続くのは、まるで何かの台本でも読んでいるかのような棒読みの言葉だ。

「蓋が無くては、この先保存は難しいだろうな。街も近い事だし、今日はそれ全てを食べきっても問題あるまい。ああ、そうだ。そうだとも。問題あるはずがない」

まくしたてられる言葉に軽く首を捻りつつ、戒李の視線は壺の中へと向く。

中身は、どうやらメンマらしい。

壺漬けという事なのだろうが。普通のメンマと違って、味付け用のタレの匂いまでが壺の中から漂ってきている。

ゴクリ、と生唾を飲む音が正面からした。

「あー……これは、趙雲殿の食料だ。順番で言うのと、そちらが先。という事でどうかな？」

何?! と心底驚いた様な声を出した趙雲は、ホントか? ホントにいいのだな? と疑い半分の視線で戒李を見る。

頷く彼が左手を前に出せば、刹那の迷いを経て彼女の手が壺を受け取った。

ガツチリとホールドした壺の中から、箸でメンマを摘まみだし一口。同時に、顔が至福の物へと変化していく。

表情が豊かなのはどちらなのかと呟く戒李の声も遠く、趙雲は一心不乱にメンマを食す。

(と言うか、メンマが主食ってのはどうなんだろう?)

炭水化物とか必要だろと思わなくもないが、そこは敢えて口にしない。下手に刺激して、至福の時間を邪魔するのも可哀想だ。

そう判断して、戒李は再三に渡り空へと視線を向ける。

今度は何が見えるのかと思う期待は、しかし月を雲に隠された事で萎えてしまう。

僅かにでも月が顔を出していれば、風流な景色に見えたかもしれない。だが、完全に隠してしまうのは駄目だ。駄目すぎる。

正面には、しばらく帰つて来ないだろう趙雲。頭上には、雲で覆い隠された空。「服。乾かすか」

眩く戒李の言葉は、どこに辿り着く事もなく霧散した。

月に叢雲、趙雲にメンマか。そう彼が思ってしまうのも、やむないことである。

後に、交代で見張りをしつつ朝まで野宿が決定し。且つ、ジャンケンに負けた戒李は交代時間がくるまで今の状況——趙雲が女という事実——を悩み続ける事になるわけだが。

そこへ「実は他の武将も女かもしれない」と言う、喜ぶべきか悩むべきか微妙な案件が追加されるのは、その更に後の話だ。

因みに、それら全ての疑問へ対して出された答えは「ああ、うん。まあ、世間には色々な世界があるし。そういう事もあるかもね」という。もう半ば諦めにも近いものだったりするのは余談である。

出来る事なら、男であつて欲しいな。そういう思いがそこに込められているのは、戒李にとって当然の願いだつた。

2 超逃走劇 その1

辿り着いた街は活気がある、とは少し言いづらい微妙な感じの街だった。

活気がないわけではないが、盛り上がりつついるとも言いきれないような残念さがある。これも前にいた世界と文明のレベルが違うからか？ と首を捻る戒李はとりあえず刃物屋の前にいた。

武器屋へも寄ってはみたが、残念なことにそれほどいい物は揃っていないのである。

仕方なく大中小トリオから『譲り受けた』武器を売って二束三文にし、こうして選り好みする事無く刃物全般へと視野を向けているわけだ。

当然だが、鈍らな剣を使うよりは中華包丁を使う方が攻撃力は高い。変なプライドさえ気にしなければ、こちらの方が使い勝手もいいだろう。

「と言う事で、その大鈍と手斧を貰おう」

「へい、ありがとうございます。ところでお兄さん、山へでも行く気ですか？」

手斧っていうかトマホークっぽいなあと思いつつ、渡された2つの刃物を革で作られた鞘に収めつつお金を払い。そこで戒李は、ん？ と首を傾げた。

まあ、木こりかと聞かれたなら似た様なものだ、とでも答えて流すつもりだったが。しかし、今の質問には意図が見えない。

まるで、山へ向かう事そのものを疑う様な質問である。

「あー、いや。山へ行くつもりは無いと思うが。いかんせん旅の途中でね。世事に疎くなりつつある。この辺りで何かあったのか？」

戒李の言葉に納得した店主は、成程と答えてお釣りを差し出しながら話します。

つまりは、こういうことらしい。

最近、各所で黄巾党の動きが活発になってきた。

更に、あろうことかその黄巾党の一部が近くの山の中へ潜伏しているらしい。

その山は過去に鉾山として使われていた山らしく、到るところに横穴が空いていて攻めにくい様子。

黄巾党が根城にしている正確な位置が判然としない為、この街の領主殿も手を焼いているとか。

主に、山越えをしようとする人の荷物を狙って出没するようだ。

「へえー。世の中は物騒だなあ」

本当ですよと苦笑いする店主と別れを告げ、戒李は街の中をぶらりと歩きだした。特別目的地があるというわけでもないが、趙雲を待っていないとはならない。

何やら挨拶をしてくる、とかいう一言を残して消えてしまったわけだが。本当にどこへ行つてしまったのやら。

と言うよりも、いったい何処へ挨拶に行ったというのか。

「まあ、考えるだけ無駄なんだろうし。向こうが見付けてくれるらしいから、俺は自由行動出来るわけだが」

差し当たり、何処へ行こう？　と言うか腹減つたから飯だな。そう決断して、戒李は歩を進める。

何処でもいいが、出来るなら美味しい物を食べたいというのが本音だ。

さて？　と匂いを頼つて歩を進め、あっちへこつちへと行つたり来たり。

行く当てを定めずに食堂系の店が立ち並ぶ区画を歩きまわつて、いい匂いのする場所を探す。

「ん？　これはいい感じの匂いが……」

「ふむ、匂い？　そんな物で、何を探しているのだ？」

「あー……うん。いや、美味しい飯屋を探していたんだけど。心臓に悪いから、気配を消して近付くのやめてくれ」

不意に背後から来た声に、戒李はゆっくりと振り向く。

そこにいたのは、先程挨拶がどうこうと言つて消えた少女の姿。吐息して、頭を掻き

ながら身体ごと振り返った。

視界に映る愉快な趙雲の姿は、間違いなく性質が悪いと評していいものだろう。やれやれと首を振って、戒李は呆れた風を装って見せた。しかし、嫌味すらも通じないらしい趙雲は更に愉快な笑みを濃くする。

「まあ、いい。とりあえず、要件とやらは済んだのか?」

「いや、まだだ。これから、その要件を済ませる為に行く」

はい? と戒李は首を傾げた。

ここにいるというのは、つまり挨拶が終わったという事を意味するのだろうか。

そこは間違いないはずである。

では、それで用件も終わりじゃないのだろうか? それ以外にも、更に用事があると? と首を捻って、しかし彼女の事情を知らない戒李に答えが出せるわけもない。

ここは、素直に事情を問うのが吉だと判断する。

どんな用事だ? と戒李の口が動く前に、彼は首根っこを趙雲に掴まれて引き摺られていく。

疑問を持つ間もなく連行。事情もさっぱりわからない状況で、何処へなりとも連れ去られる。

「まあ待て。ちよつと落ち着け趙雲殿。何故、俺は人攫いに遭っているのか?」

「人攫いとは人聞きが悪い。これから近くの山に潜むと言う賊を退治しに行くから、付いて来いと言うだけのことだ」

何でそう言う流れになった？ と問いたい戒李ではあるが、鼻歌交じりに歩く趙雲がそれを聞き入れてくれる気が欠片もしない。

山に潜む賊というのは、先程の刃物屋が言っていたそれで間違いないだろう。

確か、拠点がはつきりしないとか言っていたはずだが？ と首を傾げながら、戒李は的確な回避の方法を思いつけないでいる。

出来るなら、面倒事であつて欲しくないなあ。そう思う抗議の意思は、どこまで神さまとやらに聞き入れてもらえるのだろうか。

そもそも、神がいるならこういう流れを作ったことを呪いたい気持ちで一杯だが。もろもろを吐息一つに押し込んで吐き出し、戒李はズリズリと引き摺られていく。

⇒

その2

やつてきました山の前。

街に在る間、趙雲がいつたい誰と話していたのかはさっぱり不明だが。話し合いによつて兵を幾らか借りて来たらしい。

お陰さまで、戒李の背後には200の兵力がいるわけで。

情報によると、賊の数はせいぜい50〜60ぐらいらしく。普通にぶつかれば余裕なんじゃないだろうか？ という戦況だったりするわけだ。

もちろん、あくまで『普通にぶつかれば』の話だが。

賊は、どうにも山の中にある古い坑道を巧みに使っているらしく。刃物屋の主人に聞いた通り、はつきりとした拠点の位置がわからないらしい。

「で？ そんな状況でどうするつもりですか、趙雲殿」

「知れたこと。相手は烏合の衆なのだから、一騎当千の勢いで当たれば問題ない」
「問題ありまくりだから、やめてください趙雲さん」

合唱と共に、戒李は深く深く頭を下げる。

頭の上から響くのは、趙雲が短く唸る様な声。

これで思いとどまってくれれば、素晴らしく幸いだなと愚痴に近いなにかを呟きながら代わりの案を考える。

却下した以上、何か別の方法を提示しないと趙雲は本当に突貫しかねない。

思案。

もういつそ、出口で焚火でもして焙り出すのが早いんじゃないか？　と思わなくもないが。

「ああ、それは駄目だ。何しろ、街の娘が数人捉えられているらしいからな」という趙雲の一言で却下される。

出来るなら、そういう情報は早めに提示しておいて欲しいものだ。

吐息一つで気分を切り替え、再度の思案に耽る。

あまり長考していると、趙雲が勝手に突撃とかしそうなので迅速に思考を纏めていく。

(にしても、情報が少な過ぎやしないか?)

わからないという事がわかっているよ、なんてレベルの情報しか手元にない。

こういうのは、場合と状況によるが基本的に無駄な情報だ。

映画とかドラマの中で言っているのは、単純に格好いい台詞だからに過ぎないだろう。

そもそも、殆どの場合「わからない事がわかっていきます」とか言つた瞬間殴られるんじゃないか？ と戒李は思う。

順調に思考が逸れてきているな。そういう自覚を持つて、戒李は正面を見た。

紅い派手な装飾の直刀槍——龍牙というらしい——を抱えた趙雲が、まだか？ と焦れた様な表情を向けてきているのしか見えない。

背後を見る。

手に武器を持ち勇壮と並ぶ兵士たちが、最後の頼みはアンタだけだと言わんばかりに血走つた視線を向けてきているのしか見えない。

(……追い詰められている？ 主に俺が)

戦闘も始まっていないと言うのに、変な話だ。

とりあえず、斥候を放つて周囲を探らせ見付かれれば吉。

見付からなかったら、彼らが帰ってくるまでに次の案を考えとくという方向で決着を付ける。

むしろ、自分で自分の首を絞めた感が否めないが。そこは順調に斥候が見付けてくれる事を願いつつ脳みそを回す。

戒李が山に潜伏する賊の話聞いたのは、趙雲と刃物屋の店主からだだけだ。

その会話の中に、使えそうな情報があつたか思い出すところから始めてみる。

「ん？　そういうえば、山越えをしようとする人間から荷物を巻き上げるんだったか？」
確か、そんな事を刃物屋の店主が言っていたはず。

襲いに来ると言う事は、つまり賊が姿を現すとと言う事で。

流石に全員でぞろぞろと盗賊行為をするとも思えないので、実行の際は少人数だろう。

つまり、囷とか使えばはいはいと捕まえられそうである。ゴキブリホイホイならぬ、黄巾党ホイホイというやつだ。

とりあえず斥候を背後に見送って、戒李は正面に整列した約200の集団へ視線を向ける。

仮に囷を使う前提で話を進めるとしよう。

そうなると、この中から10名ほど選んで追跡部隊を編成する必要がある。誰かをわざと賊に捕らえさせた上で、撤収していく後ろを追跡部隊に追わせるのが効果的だろう。

囷役は、生きたまま捕らえられるのが最善だ。と言うのも、いざ追跡が失敗したときの保険が必要なからだから致し方ない。

極力、口のまわるやつを任命した方がよきそうだ。

(荷物の偽装は、持ってきた物資で可能。なら、商人辺りの設定が無難か?)

ふむ？ と僅かに首を捻って、戒李は脳内を整理していく。

手元の少なすぎる情報と共に、作戦実行時の成功確率というものを大まかに予測。低くはない。

だが、決して高いわけでもない。

白でも黒でもない、ある種のグレーゾーンというやつだ。

「まあ、俺が自分で困になるのなら問題なし。クリアだな」

「くりあー？　なんだ、その言葉は」

領き、予測思考を済ませた戒李の後ろ。さつきまで斥候に指示を飛ばしていた趙雲が、いつの間にかそばまで来ていた。

これで運良く賊を発見出来れば、こんな綱渡りの必要は無いのにな。と思う反面、実行することになるだろうという予感もある。

正直、街の領主殿が何度も探して見付からない賊だ。

自分たちは今回が初の搜索なのだから、そうそう見つかるものでもない。

不思議そうな表情で、眉間に皺を作る趙雲を見て吐息。

どうして俺がこんな事を考えているのかと文句を言ってやりたくもなるが、ここはぐつと我慢だ。

「クリアは、はつきりやすつきりとかを意味するが。今の使い方の場合は、一定の条件に

対しての問題点を改善できた。と言う意味で使ったことに……ぶっちゃけるが、何故言語学習になった？」

勉強は置いといてだと前置きしてから、戒李は趙雲に今し方考えた内容を説明する。内容は具体的に、時には手持ちの情報で意見の補強までして。

何をやっているんだろうと失笑をかみ殺し、必要な物と人員の説明で締めくくった。

どうだ？ と僅かに首を傾げ問えば、趙雲からは沈黙が来る。

答えがないわけではない。単純に、戒李の意見が何処まで通用するのかを予測しているようだ。

たっぷり呼吸3つ分の間が空き、趙雲の口から「ふむ」という音が漏れ。

「いいだろう。但し、荷台が大きなものしかない。馬車の大きさから考えて、一人歩きの商人というのはおかしい。付き人役で、もう一人連れて行ってもらうが？」

「趙雲殿でないなら、誰でもかまわんよ？ と言うか、流星に指揮官なんだからそんな無茶言わないよな？」

ははつと笑いつつ、冗談のつもりで吐いた言葉に。しかし、笑いではなく驚愕という反応が来る。

なにいつ?! と叫び出しそうな本人から視線を逸らし、約200の人員に向かって声を張り上げ。

「誰か、俺と敵地のど真ん中まで行く奴！ 挙手っ!!」

いろいろ空気の読める彼らは、一瞬にして全員が手を挙げた。主に、指揮官無しとかいう無茶な戦闘を避けるために。

素晴らしい判断能力だなど満足気に頷きながら、再度振り返る戒李の目前。苦々しげに唸る趙雲の姿が、そこにある。

こいつ、乱闘とか好きなタイプだなど頭痛を感じながら。

「今回は諦めてくれ、趙雲殿」

「……まあ、致し方ない。案を出したのは戒李殿だ、先鋒は譲るとしよう」

「ははは、嬉しくて涙が出そうだよ」

どうしたと敢えて聞き返してくる趙雲に、何でもないと答えて流しつつ、約2000の集団に向けて再び振り返る。

どういうからくりにしろ、これまで上手く逃げてきた賊たちだ。おそらく斥候は、手ぶらで帰還するだろう。

ならば、準備が必要だ。

⇒

その3

追跡部隊の選抜は趙雲殿に任せるとしてと前置きした戒李は、全体へと視線を巡らせ。同時に、見える範囲全ての兵が視線を逸らす。

ん？ と首を傾げながらも一巡させる視線から逃げるように、兵士たちの視線がウエーブで逸らされていく。

続くのは、ひそひそと囁かれる声で。

「さっきはああ言ったけど、ちよつとなあ……」

「ああ。むしろ、捕まったら殺されるだろ」

「とりあえず、趙雲様が指揮してくれるならなんでも」

「つてか、なんでアイツは趙雲様と親しげ？ 死ねばいいのに」

などの声が聞こえてくる。

中にはわざと聞こえるように言っているものもあるようで、主な内容は妬み嫉みの陰口だ。

領主に直接面会した趙雲は、何かしらの売り込みで人望をキャッチしたのだろうが。如何せん、戒李はそれに同行していない。

周りから見れば、趙雲の連れだったからという理由だけで現れたばつと出の新参者も同義。

そんな位置の戒李が、ここまで重宝されれば不満も出る。

「現金な奴らだよ、全く。まあ、いいが……では、俺も言葉を尽くすとしようか」

真横へ戒李が腕を振る動作に連動して、黒いコートの袖が乾いた音を響かせた。

音に注目して兵士達のざわめきが沈静化し、タイミングを計っていた戒李の声が響く。

「俺が賊に捕まり、下手をすると殺されるだろう姿を見たい者はいるか？ 付いて来れば特等席で見られるぞ。素晴らしく憂さ晴らしに成ること受け合いのやつがな」

反応は沈黙で来た。それも、驚愕の沈黙だ。

自分が死ぬ瞬間を見せてやるから来い。などと、いったい何処の気違いが言っているのか。

莫迦にも程がある。

しかし、驚きで静止している周囲へ、獐猛な笑みを送る戒李は更に言葉を続け。

「危険を感じるなら、賊に襲撃された瞬間に逃げてもかまわん。あとは適当に距離をとって、観察でもしていれば結果が出るだろうさ」

どうだ？ と問う先、兵士達が今度は気まずさから視線を逸らした。

それもそうだろう。

こんな事を言われた後で、名乗り出られるわけもない。

「俺と一緒に来る奴は、名乗り出てくれ。ん？ どうだ？」

どうだとはなんだ。そんな戸惑いの視線が交わされ、沈黙がどよめきに変わりつつある。

兵士のくせにメンタル弱いな、と戒李が肩を竦め。

しかし不意に、1人の男が列を掻き分けて現れた。

陽に焼けた、褐色の肌をした男だ。

歴戦、と言うには少しばかり迫力に欠ける。だが、間違いなく強者であろう男。

肩幅が広く、そこらの兵士よりも体格は圧倒的に大きい。

しかし、彼がただの筋肉だるまと言うわけでもなく。必要な筋肉だけで武装された身を持って、それはなお巨軀と言い表せるものだ。

ここまできると、もはや才能だなど戒李は思う。

身体的に恵まれた、勝ち組というやつである。

「私が、同行しましょう」

禿頭の大男は身体の大きさに似合わない柔らかな口調で喋り、手を差し伸べてくる。

握手かと理解した戒李は、突き出された右手を左手で掴み。ほぼ同時に、右の拳が大

男の顔面を狙う。

ズパンツ!! と快音一つで直撃した拳には、手応えがあつた。

打撃し、鼻の骨をへし折るはずだった拳が受け止められた感触が。

「うん。お前さんなら、そうそう死なないな」

自分の手より一回りは大きな手のひらへ拳を埋めつつ、戒李は拳で押し込もうと力を入れる。が、大男はぴくりとも動かない。

逆ににこりと柔らかな笑みを見せたかと思えば、同時に戒李の身体が宙を舞う。

投げられたのか、と理解したのが1秒後。姿勢制御に両腕を開き、コートへ空気を受け止めさせる動作に入ったのが更に1秒後。

投げられた状態から、身体の上下を入れ替え。且つ、手近な木の枝でワンクッション入れてから着地したのが更に3秒後。

合計5秒を使用して、戒李の身体は地に足を付ける。

正面、大男はこちらを見ていて。

(武器を構えはしない、か……)

面白いなと思ひ、くつと喉から笑みが漏れた。

同じ様に大男も柔らかな笑みを見せて。

「面白いですなあ、アナタは」

大男の言葉に答えたのは笑いの声。

はという音を6回は続け、今度こそ差し出された右手を右手で取る。

「ああ、面白いとも。お前も大概だがな？」

さあてと前置きし、連れて行く奴が決まったぞ？ と趙雲に報告しようとして振り返った先。

固まる一般兵と、眉間に皺を寄せた趙雲がいる。

「随分と楽しそうだな」

不満と呆れを緬い交ぜにした様な声に、戒李の「アルエ？」という間抜けな声に応え。

だが、それ以上趙雲の言葉が続くことはなく。彼女の号令一つで準備が始まる。

おやおやなどと声を漏らす大男へ半目を向けて黙らせた後、自分達も準備をするために動き出す。

付き人っぽい格好になってきますと側を離れる大男を見送り、戒李も偽装荷物の中に自分の武器を紛れ込ませた。

この世界がちよつとだけ楽しく成ってきた。

だが、それとは別の意味で趙雲殿のことどうしよ、とか呟きつつ進む彼の足は無駄に軽やかだ。

ギシギシと軋む荷台を押しつつ登山中。

当然、道とわかる程度の舗装しかしていない道は険しい。

どれ程かと聞かれれば、兵士達の好意で満載された荷物の重さで進みにくいぐらいには険しい。

先頭で嘶く馬も、どこか不満げな声をあげているようだ。

売られた喧嘩は買うぞ？ と内心で言葉を吐く戒李の横。

こちらと同じように荷台を押し大男がいる。

陽に焼けた褐色の肌にうっすら汗を浮かべ。テカった禿頭は陽光を絶賛乱反射なわけで、正直な感想は眼に痛いだが。

実際、付き人役が彼でなかったら賊に捕まる前からへばっていた自信がある。

まあつまり、そんなうんざりする量が積載されているのだ。

「肉体労働派じゃないんだがな、俺は」

呟くような一言に反応してくれる存在は、今ここに1人しかいない。

顔を半分ほどこちらへ向けて、柔和に笑む大男は。

「では、賊との交渉の際。その実力を見せていただきたいですな」

嫌みか？ とも思ったが、おそらくは本心なのだろう。

その証拠に、こちらの手にかかる重量が少しばかり減る。おそらく、彼が押す力を強

めたからだ。

有り難い事だが、これでは自分が怠けているようにしか見えないのも事実。戒李も吐息一つで荷台を押す力を強める。

そういうえばと前置きして、世間話でも続行しようとした戒李の声が不意に止まった。言葉が来ると軽く構えていた大男は、急な無音に首を傾げる。

顔の半分を振り向けるが、その視界に入るのは眉間に皺を寄せる戒李の姿だけ。

まさか賊の気配でも感じたのか？ と周囲を注意深く探ってみるが、特別そういう気配も感じられない。

なら、いったい何なのか。そういう意味の言葉を投げ掛ければ、最初に短い唸りが返った。

更にたつぷり5秒の間を空け。

「お前さん。名前、なんだっけ？」

「……………は？」

だから、名前と若干気まずそうに言う戒李へ、大男は盛大な吐息を送る。

出発の際に言った名を忘れるとは、なんて男だという思考が過ぎり。同時に笑いが漏れ。噛み殺すような失笑は、いつのまにか「は」の連続音を紡ぐ。

忘れたと言うのなら、もう一度名乗ろう。いや、忘れたと言われる度に、何度でも名

乗ろうと大男は思う。

よくわからないが、この男は面白いと思えるのだ。

彼が、今後義勇兵を募ると言うなら付いて行こうと思うし。単純に旅をすると言うなら同行しようとも思う。

留まり、自分のところの領主様に取り入ろうとするなら率先して部下の位置に名乗り出るつもりだ。

少なからず、この『楽しい』と感じられる意志がなくなるまでは。

ニツと口元に笑みを作り、正面を見ながら大男は口を開く。

紡がれる音は、自らの名で。

「姓は郭、名は瑛。字は秦夷（かくえい しんい）、真名は威羅（いら）です。この先、暫くは行動を共にします。ですから、こんな所で——」

終わらないで下さいね？ と続くはずだった言葉は、戒李が急に止まったことで停止した。

一気に重みの増えた荷車を支えたまま背後へ振り向けば、そこに剣で脅され両手を上げている戒李がいる。

苦笑いで威羅を見る戒李は、肩を竦め。

「生憎と俺に真名はないが、よろしく頼むよ威羅君。いろいろと長い付き合いになりそ

うだ」

あ、この人に付いて来たの失敗だったかもと、威羅が後悔した瞬間だった。

⇒

その4

抗議の目で戒李を見るが、どこ吹く風な彼に通用するはずもない。

諦めと共に吐息し、威羅も引いていた荷台を地面に固定して両手を上げる。

どうするんですか？ という視線を向けると、戒李は頷き一つを持って応え。そして口を開いた。

「ご苦労な事だな、黄巾党の方々。山賊行為なら、荷物をやるから見逃して欲しいところだが？」

どうだ？ と問う戒李に應えるのは、総勢8名の賊の中でリーダー格と思しき人物だ。

何処か優男の様な雰囲気漂う賊のリーダーが、戒李の正面に立って鋭い眼光を向けてくる。

が、欠片も物怖じせず言葉は続く。

「俺たちを殺しても利益は無いと思うが？」

「少なからず、こっちの気分は晴れやかになるけどな」

「わあい、お前らそういう思考の人たちかよ」

吐き捨てる様に返って来た言葉へ、吐息で答える戒李は咳払いを一つ。

まあ、ここで引き下がられても困るし。などと言い訳を考えつつ言葉を進める。

「見ての通り、こっちは商人だ。それも洛陽でそれなりの大きさを誇っている」

つあまりだ、わかるか？ と優男へ語りかける顔は、口の端を歪める笑顔だ。

突き付けられている剣の切っ先を横へ逸らしながら。

「俺を押さえた状態なら、そこから楽に武具を手に入れられる。と言う事だ。勿論、武具代は払ってもらうが。お前さんたちが街を襲った後の払いで良い。俺は儲かり、そっちは戦力が上がる」

どうだ？ と言葉を括った戒李の目前、優男が眉間に皺を寄せている。

悩んでいるのかと判断してたたみ掛ける言葉を放とうとするも、しかしそれは戻って来た剣の切っ先で押しとどめられてしまう。

切っ先を向けているのは優男で、僅かに憤りの感情が見え隠れしていた。

俺は昔、洛陽に家族がいてなと切り出された言葉の着地点がわからず、戒李は眉を顰め。

「お前みたいな汚い商売をしてた奴のせいで、死んじまったんだよっ!!」

一閃。

大上段からの一撃を、右にステップを踏んで避ける。

「思わぬところで、変な地雷踏んじやったー!!」

続く横の一閃をしゃがんで見送り、落ち着けっ!! とか言ってみるが無駄。

既に3回目の斬撃を浴びせるために、優男の剣が振りかぶられている。

舌打ち一つで応じる戒李は、地面を転がる様に逃げて距離を取り。

「お前の意思で、これを勝手に判断していいとは思えない! お前らの首領に合わせて貰おうか!!」

叫びに、優男の手が止まった。戒李の頭を真つ二つにする3センチ手前で。

背後で感嘆の声を上げた威羅は後で殴ると決めて、正面の優男へ視線を向ける。

苦々しげだが、こちらの言葉に理があると判断した顔だ。

冷汗ダラダラものだが、どうやらこれで大丈夫らしい。

後は、捕まっている娘さんを助けて夜逃げすればいいわけだが。それとは無関係に、余計な言葉が優男によって追加される。

「まあ、お頭もお前みたいのは大嫌いだからな。せいぜい、皆の前で鬻り殺されるとい
い」

背中に嫌な汗が噴き出す。

言葉を重ねる毎に、ここまで状況がこじれるのは何故だろう。思わず首を捻りたい気分になった戒李である。

優男が指示を出すのに従って、他の6名が荷台の移動を開始。更に、本人を含めて残りの2人が戒李と威羅を縛って牽引する。

腕を縛られて隣を歩く威羅は、ニツと屈託なく笑って。

「いやあ、素晴らしい実力を見せていただきました。戒李殿は、人を怒らせる天才ですか？」

「わー、完全に嫌味だよなおい。そこまで屈託のない笑顔で嫌味言われたの初めてだわ俺」

まあまあ、落ち着きましようよと笑う威羅は、剣を鞘から抜いた状態で後ろにいる二人をチラリと見て。戒李にしか聞こえないくらい小声で言葉を作る。

「実際、次はどうするんです？ 囮作戦は成功かもしれませんが、趙雲様が来る前に死にますよ。私たち」

「それは早計だな、威羅君。言葉巧みに時間稼ぎでもすれば何とかなるし、趙雲殿が攻めて来た混乱に乗じて逃げればいい。ああ、娘さんの存在を忘れたら駄目だけどな？」

「言葉巧みに、ですか……今の内に、太陽の明るさを目に焼き付けておこうかと思いません」

とことん信用してないなっ!! と叫んだ戒李に剣が突き付けられ、大人しく前を向いて歩くコースへ戻る。

これ以上下手に喋っていると、見付かった時が恐ろしい。

黙々と歩き、情報通り坑道の中へと入っていく。

山肌にポツカリと空いた穴は狭く、人がすれ違うのにも苦労しそうな幅しかない。

黄巾党の2人が先行し、背後にリーダー格が1人で付く。残りは荷物の処理なのか、入口別れてしまった。

ここから導き出される答えは1つ。戒李も威羅も逃走するのは、ちよつと厳しいということである。

曲がりくねった坑道を進み、何本目かの分かれ道を超えた先。辿り着いたのは、広い空間だ。

壁を見る限り、掘ったのではなく自然発生的な洞窟らしい。そこを使いやすい様に整備した感じだ。

直径50メートル程の大洞窟には、厳つい感じの黄色い布を身に付けた人たちが満たされており。上座とでも呼ぶべきなのか、一段だけ高い場所には椅子が設置されている。

座っているのは、意外と言うべきか女性だ。それも、姐御肌な感じではなく線の細い少女。

え？ どういう状況？ と威羅へ視線を向けるが、彼の方も困惑しているらしい。ど

うしたらいいのかわからない風な視線が、戒李とぶつかる。

「あー、えつと？ 何、あの娘が頭領なの？」

優男に視線を向けてみるが、華麗にスルーされてしまう。

そのまま少女の方に近寄った優男は、彼女にひそひそと何かを耳打ちして。

声が響いた。

少女と言うよりは、大人びた艶のある声だ。

へえ……伸びるような音で発音した口は、そのまま屈託のない笑みを作り。

「斬首」

言葉には、手で首を斬る様な動作も付随していた。

「待って!!」 いろいろ思い切りが良すぎると思うんだ。ちよつとは弁解の時間とかくれない?」

「あ、私雇われの身なんで。正直、この人の商売とか知りませんし。むしろ、皆さんを支持したいと思います」

「ちよつ、裏切りが早い!! 少しは葛藤とかあってもいいんじゃないかな威羅君!!」

笑みで答える威羅の目は、欠片も笑っていない。それ以前に、笑い声が渴ききつてい

る。ああ、半分くらい本気の日だと判断しつつ、咳払い一つで戒李は仕切り直す。

傍らに大剣を持った男が寄つて来ているが、それらを意識的に無視。

冷たい目でこちらを見ている少女に、戒李は視線を返しながら。

「お初におまみえ致します。私、姓は峯鷲。名を戒李と申します。この度は、黄巾党の方が山に潜伏すると噂に聞き訪ねて来た次第。説明の時間を省くため、こちらの方には商人と言いましたが。本当は商売の『し』の字もわからない生き物でして」

振り上げられた大剣に、少女の待ったが入る。

手での制止に呼応した大剣が、振りかぶられたまま停止。そのまま下ろされる事はなく、いつでもいけちやいますよ的な状態が維持される。

少女の口から出るのは、呆れに近い声だ。軽く鼻を鳴らすような音を付け加えて、椅子の上から戒李を見下ろす。

「お前は、誰なの?」

「まあ、間諜の様なもので。情報の提供に参りました」

ぴくりと肩を揺らして反応した威羅を、戒李は視線で制止した。

いいからジツとしている。言外に表す笑みを顔に張り付け、少女へ視線を向けると恭しく片膝を付いて見せ。

「すぐ側にあります街より、あなた方を討伐するための兵が派遣されたのはご存知で?」

「いつものこと」

「では、それに関する詳細を。兵の数から配置まで、いくらでもお答えできますが」
笑顔で言葉を紡ぐ戒李に対して、一瞬だけ考えた素振りを見せた後。少女は大上段に
剣を構えた男へ向け、手を振って合図を送り。

刹那。戒李の頭上で鉛色の光が走った。

背中 of 冷たい感覚に従って身を反らせた戒李の前髪を、鈍い光を宿した鉄が削る。

はらはらと舞う数本の髪は、判断が遅かった場合首と入れ替わっていたに違いない。

はらはら首が落ちるなど、考えただけでハラハラものだ。

(今、上手いこと言ったな俺)

軽く現実逃避しながらも、次撃が来ないかを警戒。しかし、次が一向に来ないどころ
か目の前で大剣を構えていた男が退場していく。

ん？ と首を傾げて少女を見れば。

「ゴメン、間違えた」

「軽?! なんて軽い謝罪だよ!! 危うく俺の首が無くなる寸前だったというのに……」
戒李の抗議は、少女がひらひらと手を振る事で流される。

→

その5

追求しようとすれば、まわりの男たちが鋭い視線を向けてくるから困りものだ。突き刺さる視線たちを咳払いで意識の外に追い出し、椅子の肘掛けに頬杖を付く少女へ視線を戻す。

ついでだから、聞いておくこともあるのだ。

「あー。では、今の手違いに対して情報を一つ教えていただきたい」
「何?。」

「街の娘が、一人捕まっている様ですが。どちらに?。」

質問の意図がおかしいかな?　とも思わなくはないが、これでわかれば上々。

わからなかつたとしても、この後は逃走あるのみなので知った事ではない。放っておけば、趙雲たちが助け出すだろう。

案の定。少し首を傾げた少女は、隣の優男へ視線を向ける。

怪訝な表情になっていた優男も、こちらを探る様な目付きで睨みつけ。しかし、不意に何かを理解したように納得顔となった。

そのまま少女へ耳打ちをして、彼女へも納得顔が伝染する。

果たして返つて来た言葉は。

「それ、私」

は？ と間抜けな声が漏れた。それも二つだ。

発生源は戒李と威羅。言葉の意図が掴めない二人は、一番説明力のありそうな優男へ視線を向ける。

返つて来たのは、嫌そうな顔。

こちらが嫌いな事はヒシヒシと伝わってくるのだが、事今回の話題に関しては説明が欲しい。

根気強く視線を向ければ、仕方ないと言った風に口を開いてくれた。

「お嬢は、もともとふらふらと街に行く癖があつてな。それを俺達が連れ戻した時に、そう言う噂が立つたんだ。まあ、悪名があつても困らないから放置していたんだが」

そう言う事は、やめとけつて言う忠告なら無駄だぞ？ と優男が付けくわえる。どうやら、さっきの質問を注意喚起と勘違いしたらしい。

その好意的な解釈は嬉しいのだが、むしろ一氣に來た脱力感で戒李も威羅も膝から崩れ落ちた。

縛られた手を地面に付き、深く深く溜息を付く。

「もうさ。お嬢つて呼ばれてるとか、あの娘が単語でしか言葉を作らないとか。色々言

「いたい事はあるんだけど」

「ええ。とりあえず、我々の仕事が終了した事を喜びませんか？ 他の色んな事は棚上げして」

「そうだな、威羅君と戒李が言葉を返したのに合わせ、彼の袖から幾らかの小さな球体が零れ落ちた。」

コロコロと転がったそれは、煙を噴きながら辺りへ散らばり。

同時に、あーあと紡がれる戒李の声が気だるげに響く。

「ちよつと落としちゃったな。威羅君、そっちの準備は？」

「はあ。袖の中で火を起こすつて、実はかなり難しくありません？」

「じゃあ、いつそ袖ごと種火にしちゃえよ。それだ!! 的なやり取りを経て、辺りへ煙を噴く球体がばら撒かれた。」

「なっ?! と驚く黄巾党の一同の前に、くつと喉の奥を鳴らす様な笑みで答える戒李。」

「口から出る言葉は、文字通り笑いを含んだものだ。」

「まあ、原料は狼煙の物だが。量が量だから火傷には気を付けるよーに」

「はい、撤収!! と戒李の声が響くのと、大洞窟の中が煙で一杯になったのはほぼ同時。」

「あとはただ、煙に巻かれるのみである。」

3 救出活劇 その1

狭い通路を、2人の男が疾走する。

片方は禿頭の大男。もう片方は、爬虫類の様に細い瞳を煌めく緋色で彩った男だ。

彼らは走り、移動が一直線にならないよう注意しつつ進んでいく。適度な角を何度も曲がり、放置された岩を飛び越え、後ろから飛んできた矢を跳び込み前転で避ける。

その無駄に息のあつた動きは、追う者たちにとよめきを生むほどだった。

途中、見覚えがあるような気がする大中小の3人組を問答無用で蹴り飛ばす。

どうやら彼らは、こちらから押収した武器を運搬していた最中だったらしい。

おかげで、手元に殆どの装備が返ってくると言う幸運な出来事が起こった。

「見ろ、威羅君。どうやら、天は俺たちに付いているようだぞ?」

「なるほど。では、天が付いている戒李殿。後ろで弓引いている莫迦どもを蹴散らしてきてください、1人で」

「わはは。無茶言うなあ、威羅君は。いっそ、君がその大きな身体を生かして盾になってくれてもいいよ?」

ご冗談をと互いに笑って、同時に曲がり角へと転がり込むように跳ぶ。

背後から来るのは、鋭い銀線を虚空に残す凶悪な武器だ。

かすりそうなぐらい近くを通過したそれに嫌な汗を流しつつ、全力疾走で次の曲がり角を目指していく。

段々、今どの辺りを走っているのかわからなくなってきたが。だからといって、止まれば満面の笑顔で両手を広げている『死』が気さくに挨拶してくる事だろう。

はつきり言つて、そんなものは願ひ下げだ。

「このままだと、そのうち追い詰められるの気がしてきたな」

「でしようね、地形を熟知しているのは向こうですから。趙雲様が到着するのが先か、包圍網が完成するのが先か。賭ですな」

嫌な賭だなあとと思う戒李は、左右に伸びる通路の右を選択して跳び込む。同じ様に威羅が続いて、更に矢が通過し。

そこで2人は動きを止めた。

再びの疾走はない。しかし、かといって迎撃をする様な動きがあるわけでもない。

あるのは冷や汗。驚愕と呆然、そこへ呆れを足して絶望のスパイスと共に鍋でコトコト煮たら完成する感情が湧きあがっている。

今、戒李の視界を埋めているのは金銀財宝だった。

「とんでもないところに飛び込みましたね、私達」

「ああ、ホントにな……って、そんな呆けてる余裕なんて無い！ 扉だ威羅君!!」
言うのと同時に振り返れば、有ります！ 神様ありがとう!! と高揚した声が聞こえてくる。

色々テンション高いなあとも思うが、横文字が通用しないだろうし説明の間も惜しい。

急いで閉めるように指示して、門（かんぬき）を差しバリケード代わりに盗品を積み上げていく。

立てこもる事への不安を感じつつも、戒李は悪趣味な黄金の像を木製の扉の前に設置。続けて高そうな机も置く。

「ううむ……ここからどうするか考えてないんだけど、その辺どう思うよ威羅君」
「ぐだぐだ言ってる間に、重りを運ぶの手伝ってくれませんかね!」

言われなくてもわかってるってと手をひらひら振りつつ、高そうな剣を何本か掴む。簡単に扉が開かないよう、地面に突き刺してうまい具合に噛み合わせる為だ。

まだバリケードが占領していない隙間を埋めるように次々と剣をぶつ刺し、最後の空間へ辿り着いたところで手持ちが足りなくなった。

別に手持ちの刃物を使っても良いが、背後には腐るほど予備があるのだ。そっちを使わないと損というもの。

振り返りながら、今度はいざ踏み込まれた時用の罾を構築しようとしているらしい威羅に声を投げる。

盗品の中から材料を発掘しようと奮起する彼の右手が、いい感じで宝の山から柄だけが飛び出している剣を支えに握っているのを見つつ。

「威羅君威羅君、ちよつと刃物足りなくなっちゃった。その右手で持つてるのこつちに投げてくれる？」

「さつきから思っていましたけど、あんた結構余裕だなっ!!」

どうやら敬語を使う余裕も無くなってきたらしい威羅は、こちらへ顔を向けることもなく無造作に右手を振った。

それでも殆ど戒李のいる場所へ正確に剣を投擲できるんだから、彼の腕は大したものだと評価できる。

まあ落ち着けよ威羅君と失笑気味に呟きつつ、戒李も無造作に剣をぶつ刺そうと手を振り上げ。

そこで違和感が来た。

ん？ と一瞬わからなかった違和感は、手の中にあるものから来ているのだと気付く。

(何だ？ このしつくり来過ぎる重みは)

たまたま店頭で手に取って、扱いやすそうだと思う程度の感触ではない。どう考えても、長年使い込んで身体に馴染ませた得物の感覚だ。

あ、ん？ と首を捻るような動作で視線を上へ。ジャストミートで受け取り、自らが振り上げている物体の全容を見るために緋色の双眸を動かしていく。

初めに見えたのは短い刀身だ。刃渡りにして40センチほどで、表面に不自然な溝が彫り込まれている。

続いて気付かされるのは、直剣であるくせに片方にしか刃のない造形。

そこに日本の直刀を思わせる細さはない。剣としての重量感と、肉厚な刀身が鈍い光を放っているだけだ。

「おっと……」

これが手に馴染むのも当然。なにせ戒李の探し物だ。

探していた2振りの内、早くも1本が手元に返ってきたのである。

こんなに早く見付かる予想していなかったが、状況的にも嬉しい誤算と言っていいたいだろう。

あるいは、そういう巡り合わせだったのだろうか。

昔、何度かこの2刀を手放そうと思ったことがある。しかし、捨てても売ってもいいかは手元に戻ってくるのだ。

壊そうと思えなかった優柔不断さも、あるいはこの因縁のせいかもしれない。

そう適当に結論づけて、戒李は手持ちの入れ換えを判断するために視線を巡らせた。後ろでなに遊んでるんですか？ と言いたげな視線を寄こす威羅の事もある。

とりあえず無視するが、あまり時間をかけるのもよろしくないだろう。

(流石に、これ以上装備を増やしても動き回るのに邪魔だろうな)

扉を支える強度と、少しでも身体を軽量化出来るぐらい重いもの。と思考して、一瞬できた答えに逆らうことなく手を伸ばす。

掴むのは、購入してから一度も使っていない手斧。

多少勿体無い気はするが、大鉈に比べて手斧は使い勝手が悪い事を考えると致し方ないだろう。

こういう狭い場所で大振りをする、手酷いしっぺ返しを食らいそうである。

「威羅君。そこらに鞘とか落ちてないかな？ 流石に抜き身で持つのは怖いんだが」
手斧が扉へ噛むよう地面に突き刺し、それと同時にノックが来る。

中の人間に呼びかけるような優しいそれではない。

ドゴツ!! と重い音を響かせるのは、扉の向こう側で大質量の何かが突進している証
拠だ。

重音は短い感覚で連打され、その一発一発で耐えきれなくなつたバリケードが徐々に

崩れていく。

時間の問題かなあ、と悠長に呟く戒李は思う。

通路の横幅から考えて、巨木で扉を叩いているわけではないはずだ。

しかし、それと同時にここは元鉱山。巨木は無理でも、岩石ならその辺りにいくらでも転がっているはず。

助走距離が少なくて威力は足りないようだが、こう連打されたんでは同じ事だ。

手数で力を補われ、扉は着実に悲鳴を上げている。

「どうするんです、戒李殿。ここからの策は」

「そうだな……流石に、こちらの増援が来るのは承知しているはずだし。適当な所で諦めない辺り、あの女頭は徹底抗戦を選んだらしい」

目の前でへし折れ弾ける剣を見て、戒李は顎に手をやり唸ってみせた。まるで、状況をゆっくり観察するかのようである。

その愚鈍な動作に威羅は焦りを感じ、少しでも時間を稼ぐため扉を押さえに走った。同時に戒李の声が続く。

「彼らはせいぜいが60程度の手勢。俺たちだけに、何十人も向けるほど余裕は無いだろうな」

「それは、扉の向こう側が倒せる人数だと言いたいんで？」

「まあ、普通にいけば大立ち回りに成るだろうが。幾つか酷い仕掛けをすれば、5、6人くらい易い」

凶悪な笑みを作る戒李に、うわあと短い声を漏らすのは威羅の役目だ。

その2

威羅はどの辺りで選択を間違えたかなと思考を巡らせ、途中で考えるのが嫌になって扉を押さえる事に全神経を注ぐ。

「まあ、用意するからその調子で頑張っていてくれ威羅君」

「考えるな。考えたら駄目だ。気付いたら私の負け。ずっと目を閉ざしたままでいないと。心の奥底へ忌まわしい記憶を沈めるんだ。間違っていない。私は選択を間違っていないかい。ただ、ちよつぱり不規則で不幸な状況に陥ってるだけ……」

何か呪文のように色々呟いている威羅を、意識的に無視して戒李は作業に入った。

先ず扉付近。手持ちのナイフを使って、拳一つが入る程度の窪みを大量に掘る。

次に窪み地帯の延長線上へ、適当に刃物を設置。この場合、地面へ柄を埋めて刃が扉の方を向くようにする。

適当に宝を積み上げて弓避けとし、これで大体完成だ。

彼は腰の位置よりも少し低い宝の壁に隠れながら。

「威羅君威羅君。あんまり長くそこにいると危ないよ?」

「戒李殿。月夜ばかりと思うなよ、この野郎!!」

「もしかして、そっちが素か？」

素朴の疑問を無視して、「扉を押さえていた巨軀が戒李の隣へと滑り込んでくる。

ミシミシと悲鳴を上げる扉を、覗くように頭を出して見る2人。

戒李の企みが成功したなら、岩を抱えたまま突っ込んでくる莫迦が勢い余って窪みに足を取られ、そのまま剣山へと突撃するはず。更に状況が理解できない後続が、錯乱して弓を掃射するはずなのだ。

轟音と共に扉を破って飛び出してきた影は、窪みに足を取られ。しかし、持っていた岩を盾にすることで剣山の恐怖から簡単に脱してしまった。

あ、れ？　と言葉を濁す戒李の眼前。通路の方から9名の敵が、ぞろぞろと追加で入ってくる。

これは不味い。2人揃って表情をひきつらせ、集中する10人分の視線を浴び。

「予想より多い上に、罠まで失敗ですね。どうしますか？」

「どうって、とりあえず1人5人ずつが目標で。ここまで近いと、流石に弓は使えないからよかったね？」

「ぶっちゃけ、乱戦に乗じて後ろから刺してもいいですか？」

くつと喉から音が漏れる様な笑みを作って立ち上がった戒李は、手元に戻った愛剣を横風に一閃。鈍く煌めく軌跡を宙に残して敵を見る。

それぞれがそれぞれに武具を構え、既に臨戦態勢だ。

応戦の意味を含め、続いてに腰の大鉈も抜きながら声は言う。

「出来るものなら、やってみるといいよ威羅君」

口の端がぼつくりと引き裂かれたように弧を描き、戒李は緋色の瞳を愉快気に細めた。

標的として見据えられたのは、一番に飛び込んできた屈強な男。

不意に鮮血が舞う。

緋色の瞳と同じ、鮮やかな色がまき散らされる。

↓

鉈山に潜伏する黄巾党の女頭は、表情に出さぬよう努力しながらも内心で焦っていた。

見張りが駆け込んできたのは数刻前。報告の内容は、自分たちの討伐部隊が再びやってきた事で。

先程から逃亡を図っている2人組は、この部隊の人間なのだろうと容易に想像がついた。

もとより、今までは地の利を使って優勢を得てきたようなもの。

当然、相手がこちらの居場所を探ってくることは予想していたし、それに対する策も

いくらかあったのだが。

(いったい、どんな方法で……)

どうやったかは不明だが、あの2人組が乗り込んできた事によって居場所がバレたらしい。

200余りの手勢は、迷いのない足取りでここを目指しているとの報告が入っていた。

当然だが、ここにいる黄巾党は所詮ただの寄せ集めである。

策士などいるはずもなく、既に知られた居場所を暗ますような名案はない。

それでもここに留まって徹底抗戦に出ようと思つたのは、居場所がバレただけで未だ地の利はこちらにあるからだ。

流石にこの辺りが潮時なのだろうという自嘲の気持ちも手伝つて、誰もが腹を括つている。

そもそも、ここにいるメンバーは全員が元農夫ばかり。

何度かの戦いで初期の人間は数十名ほどいなくなり、更に新たな人員を迎え入れたりなどしたが、結局の所は持っていた鍬が剣になった程度の群れだ。

兵士などと呼ぶには、あまりにお粗末な烏合の衆過ぎる存在である。

他の黄巾党がどうなのかなど知らない。だが、ここにいるのは王朝の政治で喘いぎ、

明日の飯にも困った末に追い剥ぎを始めた者達だった。

刃物で脅し奪えば終了な行動に、剣の練習などさほど必要でもない。

男もいれば女もいる。

基本は成人だが、僅かに老人や子供もいるのだ。

まともなぶつかっても勝てない。逃げようにも一部を切り捨てなければ生き残れない。

だからこそ、この辺りが潮時と女頭は判断した。

切り捨てるくらいなら、最後の最後に一矢報いてみんなで死んでいこう。そうすれば、みんなと同じ場所に逝けるかもしれない。

そう言う風に全員で話し合って、逃げたい者は逃げるように通告した。

結果は、女頭にとって嬉しくも悲しい返答で。老若男女問わず、全員が手に武器を持つている。

坑道の最深部。その大きな洞窟を加工した広間に、2人組を追わせた10名を除く50名の姿が並ぶ。

一矢報いる第一歩として、あの2人組を殺し晒そうと思っていたのだが。彼らが返ってくる気配がない辺り、きつと失敗したのだろう。

残念だが、例え成功していたとしてもこれ以上は待てそうもない。

意を決した女頭は、死の覚悟をして武器を手にした仲間を見る。誰も彼もが微かに震え、しかし高揚したような熱を持っていた。

「行くう」

すつと立ち上がった女頭が一言。そう言うだけで、広間の中に「応っ!!」の絶叫が響く。

これで、全員の死が確定した。

つまり。彼女にとって、唯一の心残りが確定したわけだ。

↓

顔の右半分を血糊で染め、戒李は坑道を進む。

幸いなことに10名を相手に大立ち回りをして以来、まだ一度も敵と出会っていない。

移動はもはや疾走ではなく、ただゆったりとした歩みである。

追撃の人員が来ないのは、つまり超雲が既に目前まで迫っている証拠だろう。

もう、これ以上の戦力を回せないと言っているようなものだ。それにしても、10名の追っ手は破格の人数ではあったのだが。

血糊が乾いてごわごわしているのに眉を擡めながら、戒李は左手を見下ろす。

手の中にあるのは、刀身を適当な布でくるんだ剣が一振り。

布の原型は鮮やかな青を基調とする衣服だったらしいが、今や刃にこべり付いた鮮血を吸つて何とも言えない色に変色している。

なんでこの剣がここにあるのか全くわからなかったが、よくよく考えてみれば川原で超雲と暖を取っていたとき、乱入してきたのは黄巾党の大中小トリオだった。

もしかするとあの時、近くには他の仲間がいたのかもしれない。その仲間が剣を拾つていても不思議ではないし、或いは逃げた3人組がたまたま拾った可能性もある。

何にせよ、早々に探し物の一つが見つかったのは喜ぶべき事実だ。

「戒李殿。その趣味の悪い剣、持つて行くんですか？」

「威羅君、喧嘩売ってる？　つて言うか、実は怒つてないか？」

わははつまさかと答える威羅の目は、言葉と裏腹に欠片も笑っていない。

流石に宝物庫の中でふざげすぎたという自覚のある戒李は、乾いた笑いでそれに返した。

吐息して坑道の奥を眺める。が、人の気配など微塵も感じられない。

それは隣にいる威羅も同じ様で、だからこそこんな馬鹿話をしていられるのだが。

「急に真面目な話へ切り替えるが。今、外が主戦場になつてると思うか？」

「本当に急ですね。そう易々と、黄巾党側が坑道内の地の利を捨てるとも思えません」

2人が進む先。突き当たりますが、左右に道を伸ばすT字路となつている。

威羅は右、戒李は左の道を窺うように覗き込むが、人影もなければ気配もない。完全な無人と化していた。

「もう、討伐がおわったとか?」

「それだと、そこらに死体とか血糊とかあると思いますが?」

だよなあと同意する戒李は右左右と首を動かし、最終的に左を見て指差す。

それは、こつち行くからという意味表示なのだが、それを見ていた威羅が笑顔で口を開く。

「じゃあ、右ですね」

「威羅君、実は俺のこと嫌いだろ?」

「いえいえ、戒李殿の好き嫌いに関係なく。ここまでの経緯で、あんたに道を選ばせちゃ駄目だと思っただけですよ」

「……うん、ごめん。俺が悪かったから、せめて笑って言ってくれない? 顔と目が本気すぎるよ、威羅君」

短く息を吐いた戒李は、両手を挙げて了解の意を示す。

実際のところ、本人も直感で決めているだけだ。右に行こうが左に行こうが、どちらでもいいという思いがある。

故に、威羅の言葉を強く否定する意味もない。こんな場所で立ち往生するよりは、彼

の意見を通して先へ進むが吉だ。

その3

文句の多い威羅を先行させ、進む道の決定権を明け渡しつつ戒李は思う。

(風が流れてたから、あつちが出口だと思っただけだなあ)

確信がない上に、何故だか信じてもらえない気もする。

これが日頃の行いか……と肩を落とすも、全ては今更だ。過去へ戻って、性格から修正しなくてはならないだろう。

斯く2人は奥へ奥へと進んでいくのだが。実は左へ進むと、久しく見なかつた清々しい青空とご対面出来たわけで。

右へ進んだ彼らのご対面したのは、数が半数以下になった黄巾党の面々だった。

弓を携えた女頭を先頭に、彼らは誰一人として無傷の者がいない。

肩を貸し合い、敗走の真つ最中ですという感じが切実に伝わってくる様相だ。

まるで立ちふさがるように現れた風に見えなくもない戒李たちを、追つ手と判断した彼らは剣を構える。

数は減りに減って20と少し。この時代の戦争など、所詮は数と言うことを証明するよゆうな負け方だ。

「あー、威羅君？ 正直、君も人のこと言える立場じゃなくなったな」

「あれですかね。もしかして、我々ってどこかで死神でも拾っちゃったんですかね」

「……あり得そうで怖いから止めてくれ」

親の仇でも見るような視線が、いくつも突き刺さる様に2人を襲う。

居心地悪そうに身動ぎする威羅とは正反対に、戒李は不敵な笑みでそれに答えた。

見られた程度じゃ痛くも痒くもないなど言外に語るそれは、火へ油を注ぐ行為に他ならないだろう。

戒李は殺気立つ黄巾党の面々を見回し、その中でも無表情に近い女頭へ焦点を合わせる。

彼女の無表情は、それ故に内側で感情が煮え繰り返っているだろうことを容易に想像させた。

直ぐにでも矢を弓につがえて放ちたいだろう衝動を押さえこむように、肩を小刻みに震わせる女頭が口を開く。

他が不用意に動かないよう、坑道のだ真ん中に立つてだ。

「邪魔。どいて」

「無茶を言うな女頭君。俺はそれでも構わないが、趙雲殿はそれで納得する御仁でもなし」

くつと喉から息を漏らすような笑み付きの答えに、弓がミシリと軋む。

安い作りの弓は、女頭の細い腕に締め上げられただけで折れそうな音を発していた。

それほど怒りが濃いのか、あるいは単純に彼女の握力が強いのかはわからない。

とりあえず、そろそろ殺しの動作が来そうだなと戒李は身構えるだけだ。

姿勢に変化はない。僅かに重心を変えただけで、周りへ迎撃の準備を悟らせず待ちに入る。

そして次の瞬間、その予備動作は女頭が矢を弓につがえようとした直後に発揮された。

距離は約8メートル。6歩もあれば、十分に詰められる距離。

衣服の端を翻し、緋色の瞳が軌跡を作る。

驚くべき速度で疾走しながら、女頭が邪魔で前に出られない雑兵たちを戒李は一旦意識から消しきった。

今の相手は、彼女1人。

残り2歩の時点で、彼女は迎撃の準備が万全となる。ほんの少しの時間差で戒李が出遅れた形である。

矢が放たれたのは、更に1歩を踏んだ瞬間。狙いが左肩に定められているのを確認すると、その時点で戒李は矢を無視した。

来るだろう攻撃を完全に意識の外へと追い出し、最期の一步を踏むと同時に右腕を振る。

轟と唸りをあげるような拳が、右下段から左上段へ向かってアツパーカッツ気味に振り抜かれた。

鋭い拳が女頭の持つ弓をへし折り、同時に戒李の左肩を鉄の塊が貫く。

小さく苦悶の音を口から漏らしつつも、3歩の後退で踏みとどまってみせる。

相手の武器がなくなり、これで詰んだかと思ひ。

だが、女頭を退かせるように後ろから引つ張った優男が、そのままの勢いで追撃の突進を見舞ってきた。

「また貴様か、よくよく縁があるなっ!!」

「わあい、嬉しくねえ!! 俺、男に興味ないんだけど。お前さん、そつちの趣味の人か?」

言いながらも、今の姿勢ではまともな迎撃が出来ないと判断する。

よろめく身体に無駄な抵抗を与えることなく、威羅君!! と叫んで坑道の端まで退く。

優男からでは、急に巨軀の男が発生したように見えただろう。

戒李の影から不意に躍り出た威羅は、自慢の大槌を迷わず振り上げていた。

驚きの声も許さない大上段が、頭をかち割る軌道で落下する。

破砕音。その1つで坑道内の空間が満たされ、盛大に揺れているような錯覚さえある。

「ああ……落盤とかしないだろうな、おい」

「部下が頑張っているんですから、もつと別に言うことあるでしょうに……」

「あれ、威羅君はいつから俺の部下に？」

「……………くつ、不覚っ!!」

「ええーっ!!? 何で急に力一杯の後悔？」

あんたが悪いとか、それは理不尽すぎるわ!! とかの言い合いをする中で、2人は更に動く。

戒李は貫通した矢を折って引き抜き、威羅はかち割った地面から跳ね上げるような逆袈裟の一撃を放つ。

一撃目を急停止で回避した優男は、二撃目も上体を反らすことで回避。後退の足踏みを4回ほど繰り返す。

「おや、避けるのに精一杯かな？」

言って、戒李の紅い瞳が舞う。

筋肉の収縮で傷口を無理やり塞いだ左腕の延長では、彼の愛剣が嫌な光を放っていた。

苦悶の音を漏らしたのは、自分か相手か。その判断を下すのよりも早く、事實は結果として横たわる。

切斷。その一閃が安つばい金属音を伴つて、優男の構えた劍を半ばから切り落としていた。

沈黙が来る。

痛いほどの静寂は、それぞれがそれぞれに今の結果へ驚愕しているからだ。

そして、獐猛な笑みが戒李の表情を覆う。

どうした？ と動く口が音を紡ぎ、それで優男も我に返った。

反射的に空いている左手で新たな刃物を抜き放つも、今度は硝子の割れる様な破砕音が響く。

戒李が振り抜いたのは右。いつの間に抜いたのか、新たなる脅威がそこにある。

(大、鈍?)

思考が終了しないうちに、正面から鳩尾を蹴り上げられた優男が崩れ落ちた。

胃の中にある物がごちゃ混ぜになつて食道を逆流し、いろいろな物が地面にぶちまけられる。

苦しいと思う間もなく、次から次へと湧き上がる不快感で思考が塗りつぶされるようだ。

くつと喉から漏れる笑いの後に、声は続く。

「気分はどうだ？ 優男」

声と一緒に、戒李が追加で蹴りを見舞う。

脇腹に突き刺さった爪先は、肉を潰して骨を殴り。最早、苦悶ではなく絶叫と共に優男をのたうち回らせている。

「まったく……しかし、お前の所の女頭は勇ましいな。この状況で、矢一本持つて突進してきそうな気迫だが。超雲殿といい勝負だよ」

「くそっ!! いつもそうだ! いつも貴様ら強者は俺たちをねじ伏せる!! 俺の家族を殺して、お嬢の妹だって——がぶえあっ?!

喚き散らす声を鬱陶しそうに聞き流しながら、戒李は仰向けになっている優男の肺を踏みつけた。

力を込める毎に肋骨が軋み、声も出せぬまま圧迫を抜けようと優男はもがく。

滑稽だと失笑混じりに呟き、口の端を歪めて言葉は続いた。

「おい、聞いとけよ? 優男。これから酷く陳腐な言葉を吐いてやるから」

圧迫を解除し、女頭の位置まで蹴り飛ばして。更に言葉は続行される。

「力に力であらうなら、それよりもっと強い力にねじ伏せられる覚悟ぐらいしとけよ三下ども。中途半端な覚悟で来るから、お前らの仲間もこう言うことになる」

言つて戒李が示したのは自身の右半分。生乾きの血液がべつたりと付着した部分だ。特に顔は異色を放っている。拭われず、そのまま迷彩にでも出来そうな汚い色がそこには載っていた。

歪む唇も相まつて、もはや異常がそこにいるような錯覚すら覚えてしまう。

「いいか？ 力で全てが解決するわけもないと言うのは綺麗事だがな。撃つてもいいのは、撃つ覚悟がある者だけ。という陳腐な言葉を昔どこかで聞いた気がする」

「ははっ、今ので全部台無しですよ戒李殿」

指差して笑う威羅を、戒李は無視した。その程度で揺らぐはずもない異常は、ゆつくりと黄巾党の面々へ視線を向けていく。

視線を向けられた者は嫌な汗を噴き出し、そこにいる人物が人間であることを疑い。そして、粘つく空気に絡め捕られて誰もが動けなくなる。

足が竦んだと言つてもいい。濃密な空気に気圧されて、動けなくなった小動物のような状態だ。

口の中は干上がり、体が自然と硬直している。だが、目を逸らすこともできない。

これを逸らしたが最後、次の瞬間に待ちかまえているのは死であり、そいつは古い友人を呼ぶような気軽さで手招きしつつ大きな口を開けている。

神経が磨り減る思いで、彼らは戒李の緋色に彩られた瞳を見返す。

そして、不意に吐息が漏れた。

その4

「まあ、聞いてる限りじゃ色々事情もあるみたいだな。兵隊の中に女までいるんだから、その事情は大層な事情なんだろうけども？　こんな事して、助かるのは今回だけだと思っておけ」

は？　と黄巾党側から異口同音が漏れ出した。

やれやれと首を振り、威羅君と戒李が短く言葉を投げ合えば、了解ですという答えが返ってくる。

禿頭を軽く撫でながら、彼は「はいごめんなさいよ。ちよつと通して下さい。その可愛い娘さん、通りますから避けてくださいよ」と黄巾党の人垣を超えて行く。

「じゃあ、後ほど合流しますんで」

「ああ、いい感じに頼む。最悪、全部俺のせいでもいいから」

適当に手を振って見送り、坑道の奥へ威羅が消えたのを確認してから戒李は焦点を戻す。

未だ、状況を理解していない者が多い。が、それにかまうことなく彼は言葉を作った。「これから、うちの威羅君が嘘の情報を流す。決死の覚悟でお前らが、正面切つて総攻撃

を掛けてくる。そういう内容でな。それを受け止めるため、超雲殿たちは兵を一カ所に集中するだろう。後は軍が展開している正面と逆方向、山の裏側から必死になつて逃げる。そんで、もう黄巾党なんて辞めちまえ」

じゃ、幸運を祈つてるよと適当に手を振つて踵を返した彼に、静止の声が挙がる。

女の声。それも黄巾党の長の声だ。

「助けて、くれる、の?」

「なんだ、助かりたくなかつたのか? こつちに来た10人なら、無傷じゃないが逃走経路上でお前らのことを待つてははずだ。ちよつと手元が狂つて派手に出血させちまつたが、この通り血液を浴びてまで治療してある。問題ない。もしくは、助けるなら全員助けろんでも言うつもりか? 残念ながら俺は神じゃないし、半数も生きてりや儲けもんだと思つてくれ」

これ以上の質問がないかを確認するように、戒李はもう何度目かの視線を巡らせる。誰もが口を開かない事に頷き、今度こそ行こうとした戒李に足元から声が来た。

いい加減うんざりしつつ振り返る先には、地面に転がる優男の姿。割と真面目に反撃したので、彼の口からは薄く血糊が漏れ出している。

やりすぎた感是否めないが、こちらも左肩にいいのを貫っているから帳消しだ。

おいと始まつた声は、しかし咳き込む音でいったん止まる。

内臓に傷こそ付けないよう配慮して蹴ったつもりだが、それでも鳩尾に渾身の一撃を叩き込んだのだ。そうそう無事であるとも言えない。

「何で、俺たちを助ける。貴様に得などないだろうに」

「んー？ そう言われると返答に迷うんだけどな。気紛れと、俺が女の子好きだから？」
くつくつと喉を鳴らして苦笑する戒李は、優しく目を細めて見せた。

単純に煌めく緋色ではなく、よく見れば暗い部分もあつて深みのある瞳。それが優しげに弧を描いている。

「お前らの言つてる事がわからないわけじゃない。こんな世だ、弱肉強食なんかそこらに掃いて捨てるほど転がってる。だから、一度だけだ。不幸だったお前らに、この俺が一度だけ『救い』というやつを押し付けてやる」

後のことは好きに選べ。

そう最後に言い残して、今度こそ戒李は歩き出す。

もはや呼び止める声はない。じつとその背を見つめ、拳に力を込める者ばかりだ。

当然、戒李としてこんな事をして無事であるはずがない。裏切り者扱いは必至であり、捕まれば重い処罰が待っているはず。

それを無視しても、自分たちを救ってくれた理由は何だろうか？ と黄巾党の面々は考
える。

よもや、ここまで来て嘘を言っている雰囲気でもない。山の裏側から必死になって逃げれば、本当に逃げ切れるのだろうか。

だが、そうであればそうであるほど、そうする事の意味が見いだせない。

不可解な男だ。総勢約60名の黄巾党を全員救うのは無理と言ったが、本来は1人として救うことが出来ないはずだろうに。

女頭は、浅く唇を噛む。

状況が未だに不明瞭で、先程まで道を塞いでいた男がなぜ助けをくれるのか。その思考すら追い付いていない。

何もかも置き去りにした状態で。だが、1つだけ追い付く思いがある。

「行く、着いてきて」

意思のみが先行する言葉に、他の面々は従った。

負け、ボロボロの身体を引きずる。お互いに肩を貸して、無理矢理に立ち上がる。

足取りは駆け足。言われた通り、全ての力を振り絞って必死に逃げようと——否、必死に追いかけようと足を早めた。

追い付け、追い付いてくれ。そう意思を1つにして。

↓

揺れた草木が擦れ、辺りに音を広げていく。

まるで風を追うようなそれは、耳に心地よく滑り込んできた。

肩から僅かに力を抜き、戒李はぼんやりと現状へ意識を落とす。

超雲が部隊を展開しているだろう鉢山は遥かに遠く。文字通り必死に逃げた結果、山の形が霞むほどの距離を稼ぐことができた。

もう、それほど心配もなくなっていいだろう。

何より潜伏の可能性が消えない限り、あの坑道を無視して追ってきたりは出来ないはずだ。

とりあえずは一安心。

思わず、疲労の色が濃い息を吐き出してしまふ。

「あー……戒李殿。ちよつと聞いてもいいですか？」

「何かな威羅君。ぶつちやけ、今もの凄い偏頭痛に悩まされてるから手短に頼むよ」

では手短にと前置きした威羅は戒李の背後。30余名の人員がせわしなく動き回り、各々で傷の治療をしたり手伝ったりしているのを眺めながら。

「何で彼らがいるんで？」

「……………」

自身も優男の治療をしつつ、辺りへ指示を出している女頭。

単語で区切られた声は、聞き慣れぬ者には意味を取り辛い。

しかし、黄巾党の面々にしてみればいつも通りのようだ。むしろ、そうする方がより明確に内容を伝達できている。

吐息。今度こそ、辟易とした気分を込めて戒李は息を吐き出す。

「なあ、威羅君。面倒事になったら、逃げていい?」

「その頃には、既に私がいらないと思えますが?」

突つ込む気力すら失った戒李は、肩を落として抗議の声を飲み込む。

背後で繰り広げられる救護活動に関しては、一切の助力をしないと公言している。

彼らもそれでいいと頷いたし、むしろ襲ってきた10名の内1名は応急処置をしているのだから、どちらかと言うと出血大サービスものである。

出したのは相手だが。

この先をどうするか考えて、霞む鉾山の形を見る。

戻ると、趙雲が笑顔で迎えてくれる気がしなくもない。しかし、それが半ギレ状態で壮絶に迫力のある笑顔なのは間違いないだろう。

うん殺されるなど頷いて、その案を却下。

どの道、戒李としてはもう1本の『剣』を探せば他はどうでもいい訳で。積極的に、この三国志の乱世へ身を投じる気などない。

出来るなら、安穩と1人旅とかしながらゆっくりしたいところだ。

「最初に威羅君が、おきあがって仲間になりたそうにしたのが運の尽きだったか……」
「何か知りませんが、間違いなく私は失礼なことを言われていますよね？　喧嘩なら買いますよ？」

笑顔の禿げ大男を無視して、戒李は背後を見る。

応急処置を施された者が、動けそうなら別の怪我人を治療しに動き出す。

徐々に増えている治療者は、つまり全体の応急処置が終わりそうな事を現していた。
どういう心境の変化かは知らないが、彼らは間違いなくこう言うだろう。

「貴方に、付いて行く。そう、決めた」

「やめといった方がいいと思うけどなあ。威羅君みたいになるよ？　女頭君」

「ああ、そういう自覚はあったわけですね？　ふざけんなこの野郎」

はいはいと軽口を叩く男2人を背後から見ると小さな身体が余計に小さく見えていた。
声には大人っぽい艶があるくせに、近くで見ると小さな身体が余計に小さく見えてしま

まう。

線の細いラインを持って、しかし視線には力が籠っていた。

「あーあ。まあ、どうせ趙雲殿を敵に回しちゃったわけだし。あそこの領主には、指名手配とかされてそうだし。この辺が諦め所なんだろうなあ。本当に」

女頭の背後から、先程ボコボコにした優男も近寄ってくる。

緩慢な動きで近寄ってくる彼の目には、やはり力が籠っていて。

こちらは「いつか仕返してやる」的な匂いがしなくもないが、やはり付いてくるのは変わりないらしい。

以下、そんな感じの雰囲気を放つ視線がちらほら。

「後悔しても知らんよ？ 俺」

「いい」

「お嬢の決定でもあるし、貴様には殴られた分の借りも返さないといけないからな」

「それを言葉に出せるとは。あなたとは非常にいい友達になれると思います」

面倒を率先して回避するつもりが、既に深みへはまりだしたなど戒李は視線を空へ投げた。

どこまでも青が広がる空に、昼間でも見えるほどの星が輝いている。

もつと静かな日々を、と願ってみるものの所詮は星だ。結局、今の状況を打開してくれるわけでもない。

「誰に願えば、面倒ごとから逃げられるんだろうね」

真面目に不真面目な考えを巡らせ、打開策を考えてみる。

あーでもないこーでもないやっていると、不意に願った星が流れて消えた。

不吉すぎて笑えない。

戒李の頬にも、一筋の涙が流れて消えた。

4. 善悪問答 その1

穏やかだなどと思う戒李は、ぼんやりと空を眺めていた。

清々しく晴れ渡った青空には、ぼつぼつと白い固まりが浮遊している。

心地よい風が頬を撫で、程良い日差しで身体は暖められ、詰まるところ、本日は実に素晴らしい昼寝日和だ。

芝の上へ寝転べば、美人の睡魔が手招きで誘惑してくる事だろう。

だが、今の戒李は完全なる睡眠に落ちることが出来ない。と言うのも、せつせと左肩の傷を触る存在がいるからである。

坑道の中を鬼ごっこしていたのは、既に1ヶ月も前の事。結局、生き残った黄巾党員は60人中32人で、その全員が戒李と共に来ていた。

威羅と自分も含めて、全員で34人。無駄に大所帯だなど頭を抱えたのは、もはや懐かしい思い出となりつつあった。

「包帯、巻けない、身体上げて」

「あいよ」

不意に、文章を一文ずつ区切る独特の声が上から降ってきた。

短く応え、腹筋の要領で上半身を持ち上げれば、細い女の腕がテキパキと包帯を巻いていく。

完全に塞がっているものの、未だ触られると少しちくちくする傷口。この刺激は眠りを妨げるには十分で、しかし痛いと不平を漏らすほどでもない。

そもそも塞がっている傷口にここまで嚴重な処置は必要ないようにも思うが、付けた張本人は頑として譲らなかつた。

最近では説得も面倒になって、好きにさせているという状況である。

出来たと短く言葉を放つ加害者、元黄巾党の女頭こと姓を楊(よう)、名が宵(しょう)、字は春燕(しゅんえん)で、真名を蘭芳(らんふあん)は、ほうと安堵の息を吐き出した。

何を緊張する事があるのかとも思うが、それだけ細心の注意を払っていてくれたという事なのだろう。

丁寧に巻かれた包帯へ気を遣いつつ、どうにもここ一ヶ月で穴が増えた気をする服を着る。

これで治療は終了。

他にする事も無くなり、このまま睡魔に身を任せようと戒李は寝返りをうつ。

なんとなく男の声に呼ばれた気もするが、それは華麗に無視した。

目を閉じていると、瞼の裏で眩しい光が滲む。
心地良いなと思いつながら、その身を右へ振り。

直後、少し前まで戒李がいた場所へ踏み砕くような一撃が降ってきた。

「最近、威羅君は過激だなあ」

薄く目を開ける先、陽光を禿頭に反射させる大男——威羅がいる。

彼は足元に戦果がないのを確認すると、隠しもしないで舌打ちをしつつ。

「ああ、危うく頭を踏み潰してしまえるところでしたが。非常に残念でなりません」

「まあまあ、落ち着けよ威羅君。そう怒ってばかりいたんじゃ、そのうち気苦労で早死にするぞ？」

誰のせいでしょうね？ と不満でいっぱいな視線が来る。が、これも戒李は無視した。

威羅の後ろで呆れている優男を発見し、ついでにようと気さくに声をかける。

返ってくる答えは嫌そうに歪められた表情だ。

嫌われたもんだな、と笑みを堪えながら。

「何の用だ？」

「財政報告だ」

言つて、筒状に巻かれた竹簡が投げよこされた。

空中を舞いながら紐が解け、ばらけそうになる直前に右手でホールドすると。そのまま手を下へ振る動作の勢いを使い、目の前の地面に竹筒を広げる。

俯せのまま足をぱたぱたと動かし、支出と収入比を確認。続いて支出内容へ視線を滑らせ、そこで不意に戒李の動きは停止した。

なあ、と疑問を含んだ声が紡がれ。

「今更だが、なんで俺の所に持つてくるのかな？」

戒李の疑問に、疑問の表情が返つてくる。それも3つ。

何を言ってるんだろ的な居心地の悪い視線に晒される男へ、最初に答えを返したのは優男だ。

心底呆れたように吐息する勢いで、言葉の方も紡ぎ出す。

「この大将は貴様だろうか？」

空気が停止した。

驚愕というよりは、困惑に近い表情の戒李が優男に向かって口を開こうとする。

しかし、それを思いとどまってから威羅へと目配せした。

視線の意味に少し迷った彼は、意図を理解すると手を打ち戒李の耳元まで行つて。

「あの人は、姓を楼（ろう）、名を陸（りく）。字が緋凰（ひおう）の、真名が璃撥（りはつ）ですよ」

「ああ、それだ？」

「1ヶ月前に名乗つただろうが!! 今まで名を呼ばれた記憶が無いから変だと思つたが、そう言う理由か? と言うか、なんで語尾が疑問系なんだよ!!」

「そう耳元で喚くなよ。で、なんだつて?」

全然聞いてないじゃねえか!! と璃撥が声を大にしたのを無視して、戒李は竹簡に視線を戻す。

どうせ、こつちは全く指示を出していないのだ。放っておけば、待遇の悪さに不平不満を漏らして元黄巾党員たちは四散していくだろう。

それまでの辛抱、と自分に言い聞かせる。

竹簡に記されている内容は、生活必需品から食料関係。その支出額と、彼らが働いて得た収入額。

最初に大きく書かれた収入支出比は、僅かに黒字を出している。これだけの大所帯が生活するに当たって、一番の懸念である貧困はないようだ。

と言うのも「全員養える様な金なんてないよ」と1ヶ月前に宣言したのと同時、それぞれがそれぞれに近くの街へ働きに行ったのである。

この大所帯は、蘭芳を合わせて5人の女性と。老婆が1人に老爺が2人。残りの26人が戒李、威羅、璃撥を含めて中年から若者まで男所帯だ。

女たちは小物を作つて三老人が町へ売りに行く、更に男たちは出稼ぎに行きと色々動いていたらしい。

そんな中でも、戒李は肩の傷を理由にだらだらしていたわけだが。

「しかし、無駄に大所帯だなあ」

と、今度は口に出して状況を把握する。

食費がバカ高い。26名の男所帯中、5名は蘭芳を除く4人の女たちの子供だ。上は18才から下は14才と、彼らは本格的に育ち盛りの子供である。

食べ盛りが5人もいて、且つ重労働をしてきた男が追加で20名。こうなるのも仕方ないかと内心で吐露しつつ、続きへ視線を走らせ。

視線は一カ所で動きを止めた。

食費以上に金が使われた項目がある。内容は馬が8頭に屋根付きの荷馬車が3台。一瞬の沈黙を作つた戒李は、威羅君？ と声を絞り出して疑問の視線を向け。

「二つは物資保管用ですよ、武器とか食料の。残りの二つは居住用ですね。いずれも、少し大きめの物を用意しました」

手際良いでしょ？ と誇る本人を直視できず、地面へ顔を伏せる。

用意が良すぎるのも問題だが、食料以外にもこんなに大きな買い物が出来るほど稼げる集団というのは。もういつそ、そのまま一般人に帰化しろよと思わなくもない。

微かに馬の嘶きが耳に入り、そちらを目視すれば件の馬と馬車がある。力強く毛並みの良い馬を選べたのは、彼らが元農民だからだろうか。

そして、どこかの勇者が魔王を成敗する為、旅の途中で手に入れるような馬車が3つ。白地の布で出来た屋根も相まって、どこか食パンを彷彿とさせる半ドーム状を象つていた。

「ごめん、ちよつと……いや、かなり予想外だ。まさかここまでやるとは」

「まあ、正直私も驚いています。まさか、彼らにここまで収入能力があつたとは」

「私たち、元、農民」

「俺らの住んでた村では、これぐらい出来ないと死ぬような貧困村だったんだ。とお嬢が言っている」

つまり、職さえ見付けてやれば一般人以上にできると言いたいらしい。

その辺の斡旋能力は威羅の采配だろう。どっちにしても、戒李としては喜んでいいのか泣けばいいのか微妙なところだ。

その2

どの辺りから変なことになったのかなあと、思わず吐息する。

威羅が付いて来るのは、良くないがこの際百万歩譲つて良いとしよう。

おそらく、それだけなら問題なくぶらぶら過ごせていたはずだ。

呆れたハゲがそのうち文句を言いだすだろうから、適当な軍へ所属するのを見送つてやればいい。そうすることで、またぶらぶら1人旅に戻っていたはず。

それで良いと思うし、それが良いとも思う。

だが、どうにも黄巾党員たちを拾つた辺りから変な方向へ進みつつある気がする。

未だ黄巾の乱は終わっていない様子だが、趙雲という存在が出てきたのなら言っている間に三国志だろう。

劉備と曹操と孫権の覇権争いが、嵐のように辺りへ伝播していくはずだ。

面倒事にならなければいいなと呟きながら、最後に来月の消費予想へ視線を向ける。

そこには、必要になるだろう物とおおよその金額が書いてあった。

こういう事が出来るのは、村で全体の仕入れを管理していたからかなと思考に逃げ道を作つて竹簡を閉じた。

今度は解けぬようにしっかりと結び、璃撥へ投げ返す。

問題ないんじゃない？　と言いかけて、それを遮るように1人の男が駆け込んできた。

見た顔だなと思う戒李の前で跪き、彼は頭を下げて焦ったように口を開く。

「大将、大変ですっ!!」

「……うん。物凄く物申したい単語があつたが、今は無視してやる。報告しろ」

戒李は眉間の皺を、人差し指の腹で揉みほぐしながら続きを待つ。

はっ！　と答えた男は、慌てながらも要点を絞って話し始めた。

どうも、近くの街が黄巾党の襲撃を受けたらしい。しかも、運の悪いことに身内が5人ほど出稼ぎへ行っていた場所なんだとか。

狙われたのは街そのものらしく、完全に運が悪かつたしか言いようもない。

動けないものの生存確認はできているらしく、それが不幸中の幸いだろう。

「本当に面倒事しか持っていないな、お前等は。とりあえず、さっさと行ってさっさと回収してこよう」

「移動。準備！」

戒李の意志を反映して、蘭芳の声が響く。

動きはすぐに来た。

休憩させていた馬を馬車と繋げ、広げていた荷物を纏めに入っている。

吐息と共に戒李も身体を起こし、威羅が持ってきた剣を帯刀しながら。

「念の為、男は武器を持って。女も、目立たない武器を懐に隠している。戦場の近くへ行く事になる。気は抜くな！」

応ッ!! と各所から返答が来る。

いつの間にか大将などに祭り上げられ、正直迷惑極まりないところだが。ここまで来たなら、少しは腹を括る必要もあるだろう。

さてと言葉を作ったところで、璃撥が馬に跨って寄ってきた。こちらを見下ろし、先行すると短く意志を伝え。

「いいだろう、許す。だが、威羅君も連れて行け」

威羅君!! と名を呼びながら指示をして、2人を送り出しながら思う。

(面倒事にならなければいいが)

きな臭い思いを抱きつつも、戒李は先頭の馬車へ乗りこむ。

2頭引きの馬車が、3つ連なつて移動を開始。後続へ急ぐように号令を出しつつ、自分の乗る馬車を操る御者にも駆け足を命じる。

目的地までの距離は、それほどない。

威羅や璃撥から僅かに遅れて、馬車は道を急ぐ。

†

炎の臭いが残る中央通りを、戒李は進んでいく。背後に続くのは威羅と璃撥、更に体格のいい男が3人だ。

先行していた2人と合流したのは先程で、今は巻き込まれた5人を回収に行く最中である。

「それで？ 巻き込まれた5人は？」

「全員無事です。怪我もそれほど酷くありませんし、心配ないですよ」

「まあただ、1人が足を捻っててな。長距離の移動が無理そうだったから、本隊が来るまで酒場の前に待機するよう言っておいた。全員でかたまってるはずだ」

十分だと璃撥に答え、戒李の足は僅かに動く速さを増す。

今歩いているのがこの街の大通りで、この先に目的地の酒屋はあるらしい。

急ぐのには理由があった。

街の入り口からここまでの道のりで、3人は多くの住民たちとすれ違っている。

彼らは誰もが忙しそうに動き回り、また来る前に準備を!! という類の言葉を叫び散らしていた。

もちろん、詳しい状況などはわからない。だが、言葉から黄巾党が再び現れる可能性くらいは予想ができる。

それも今度こそ、この街を滅ぼす勢いで殺到してくるはずだ。

街並みはボロボロで、今後の収入減になるとは考えにくい。なら、いつぞ潰して次に向かうだろうというのが戒李と威羅の共通会見である。

街の人間は、どうやらそれを撃退するつもりでいるようだ。

随分やられた割には心が折れていない事へ違和感を覚えつつ、すぐさまどうでもいと思考を切り落とす。

さっさと脱出してしまえば、特になんということはない。

「そういうえば戒李殿。我々の馬車はどこへ？」

「蘭芳君に指揮を預けて、街外れの森へ隠した。ここまで乗り入れると混乱を招きそうだったんでな。運搬の人選以外は、向こうの警戒に当たらせてる」

なるほどと威羅が声を漏らす横、不意に璃撥が戒李の隣を駆け抜けていく。

向かう先は、怪我人で溢れる酒屋だ。周りの建物と比較すれば、唯一まともに機能している家屋と言ってもいい。

扉が破られているだけで、建物には殆ど傷も付いていないように見える。

そんな酒屋の軒下、そこに見覚えのある5人がいた。

地面に座り込んでいるのは1人で、残りの4人は体中に擦過の痕が目立つ程度。さして大きな出血をしているわけでもなく、傷の手当てもすっかりなされている。

「無事で何よりだな。全員を馬車まで連れて行ってくれ。俺は、治療の礼を言ってから後を追う」

首肯で答える3人の男たちが、軒下の5人を連れて来た道を戻っていく。それを暫く見送った戒李は、同じく計8人が遠ざかる姿を見送る威羅と璃撥を見て。

その場で、思わず吐息した。

え、何でお前らも帰らないの？ という意味を込めてだ。

両側やや後ろに立つ2人を順に見れば、それぞれが明後日の方向を見て白を切るような態度をとっている。

もう、何を言っても無駄だろう。

「まあ、好きにしてくれていいけどね」

言うと同時に「はい、好きにします」「ああ、好きにするさ」という具合で即座に答えが返ってきた。

とりあえずこれを無視して、戒李は周囲を見渡す。

この酒屋が無事なせいか人の集まりが多い。おそらく、酒屋の中にはもつといるだろうと予測をつけて中へ。

そして、やはり中の人口密度も高かった。

怪我をしている者から、街の入り口にいたような者まで。まるでひしめき合うように

して人がいる。

収容しきれなかった分が、外に溢れ出している状況なのだろう。

とりあえず、これだけ人が集中しているなら偉い人物がいるはず。領主でも県令でもなんでもいいから、と首を巡らせて。

そこで、再び戒李は違和感を覚えた。

確かに人は多いし、兵士と思われる人員もちらほら見える。だが、そこまでだ。

あくまで外見的特徴による判断基準だが、それ以上に偉い人間の姿が見当たらない。てつきり、対策を立てているから街の指揮が高いのかと思ったが、おかしいなと首を傾げれば、それに気付いた威羅が耳打ちを寄越す。

短い説明の中で、戒李の表情はみるみる内に苦いものへと変わっていった。

「逃げたとか……逆に凄いな。もう、俺には言葉が見付からないよ威羅君」

「同感ですね。詳しくは知りませんが、何か『天の御遣い』様とやらが今の偉い人のようです」

黙考3秒を経て、今度は微妙な表情を作る。

戒李の感想は『無意味に怪しい宗教みたいな響き』だ。

逃げる領主もあれだが、そつちもそつちでどうだよと思う。同時に、人心を掴むための冗談だろうなと無理やり結論付けた。

きつと、どこかの物好きが義勇軍でも立ち上げたのだろうと思っておく。精神の衛生上、これが最もいい方法だ。

(ご苦労なことだなあ)

なんにせよ、その天の御遣い様に礼を言えばミッションはコンプリートだ。さつさと済ませて安全圏まで逃げ、あとは風の噂に結果が聞こえてくれば万々歳と領いておく。

負けたなら、黄巾党勢力増大!! 勝ったなら、天の御遣い地上に降臨す!! 安っぽい週刊誌の見出しを彷彿とさせるテロップが、思い浮かんでは彼の頭を駆け巡る。

たぶん気にしたら負けだなと、再び領いて思考を頭の片隅へと追いやった。

その3

極力考えないようにして、酒屋の中をもう一度見回す。

今度は雰囲気重視の観察だ。

少なくとも、街がやる気を出しているなら対策を考えている人物はいるだろう。そして、ここが総本部であることには間違いないはずである。

「ん？ あれじゃねえの」

璃撥が指差す方へ視線を向けて、ああと戒李は納得した。

これだけの人口密度にも関わらず、そこだけは少しだけ空間が開けている。

机を真ん中に置いて、向かい合う男2人と女1人。神妙な面持ちで話し合っているのが実にそれっぽい。

特に女の方は武将なのだろう。美しい黒髪が目麗しいが、放つ気配は趙雲といい勝負だ。

有名人じゃないといいな、なんて心で念じつつ戒李はそちらへと足を向けた。

近づきながら、残りの2人も軽く観察してみる。

片方は部隊長といった感じだろうか。黒髪の女には劣るが、それなりに実力もありそ

うだ。

ただもう片方が問題で、こちらはいったい何なのかさっぱり見当もつかない。

いや、違う。見当は付いている。

白く光を反射する服を身に着け、緊張感のない顔で話を聞いている彼こそが『天の御遣い』様と呼ばれる人物なのだろう。

消去法での判断だが、人違いであつて欲しいという願望から思考は強制停止していた。

(どうも、今日は考えたくない事が多い日だなあ)

何度目の思考放棄だったか思い出すのも止めて、戒李は人の壁を縫うように抜けて行く。

まず、こちらが近付いているのに気付いたのは武の2人だ。

黒髪の女が僅かに早かったが、部隊長格の男も負けてはない。

殆ど同時にこちらへ視線が向いたので、とりあえず笑顔でそれに返しておく。

机の前まで戒李が歩み出て、御遣いらしき男はここでようやく存在に気付いたようだ。驚いたような視線がこちらを向く。

最終的に3人分の怪訝な視線に、戒李は浅く頭を垂れながら名乗る事になった。

「私、姓を峯、名を鳶、字を戒李と申します。この度は、我が旅団の人員が怪我の手当て

をしていただいたようで。その感謝の言葉をもつて参りました」

「いや、気にしなくていいよ。俺は当然の事をしただけだし」

最初に、軽く手を降つて答えたのは御遣いらしき男だ。

服の上から確かなことがわかるわけでもないが、見た目はちよつぱり運動神経がいいです程度のものでらう。

とても『この世界で』武芸に秀でたものと互角以上に渡り合える雰囲気ではないし、むしろ一般兵にも劣る可能性がある。

雰囲気こそ優しげな為政者。だが、戒李の直感に彼は彼に警報を鳴らす。

同じ思いに達したのか、眉間に皺を作つた威羅が口を動かさないうで声を作つた。相手に聞こえないよう配慮された、潜められた声だ。

「戒李殿。彼は……」

「ああ、なんか不味いな。戦略はおろか、そもそも殺し合いも知らなさそうだ」

「(平和慣れた金持ちか何か?)」

「(さあな、わからんよ璃撥君。だが、関わり合いにならないのが吉だというのは確実にしろ?)」

「(確かに。つてか、お前ら怖えよ……)」

1人だけ背中を向けて潜められた会話に加わる璃撥は、口は動いてないのに内緒話を

している2人を振り返る。

笑顔だ。それも、とびつきりの作り笑い。

他人との間に軋轢を生まない、円滑な人間関係の構築は笑顔から。なんてよく言うが、ここまで見事に笑顔を作ったのでは胡散臭さの方が先行してしまう。

その不快感から、さっさと追い払われる事を狙っての作戦かなとも思うが。しかし、どうにもその半分が冗談で構成されている感のある戒李は、あまり深く考えていない気がしなくもない。

威羅が付き合って同じ事をやっているんだから、あながち無意味というわけでもないのだろうが。彼とて、勢いと状況によつては戒李と同じ感じになる。

(この中で、常識人は俺だけだな)

うんと首を縦に振って納得とし、璃撥は振り返る。

今の領きは何かな？ という2人の視線を彼は華麗に無視した。

まあいいかと、2人も視線を前に向ける。

視界が捕らえたのは、戦の話に戻りたそうな兵隊長。よくわかってないようなとぼけ顔の御遣い。何故か思案中の黒髪美女。

三者三様の反応だが、気になるのは黒髪美女の思案だ。

彼らから下手な反応が出る前にこの場を離れようと判断して、戒李は威羅と璃撥に目

配せを送った。

彼の意図を理解した二人も、視線だけでそれに応える。

「それでは、我々は旅の途中。この辺りで失——」

「待たれよ」

慌てたように割り込んだ黒髪美女の言葉で、戒李は笑顔のまま停止した。

そして、心の中でゆつくりと3秒を数える。

(よし、少し待った！)

ここで思考を再起動し、静止の言葉を寄越した黒髪美女へ視線を投げた。

口からでる音は先程の続きだ。

「——礼をさせていただきます」

「おい大将。そいつは流石に無理があるだろ？」

お前、どっちの味方だ？ と視線に殺気をあびつたけだめて璃撥を黙らせる。

僅かに悲鳴めいた声が聞こえたが、そんな事は些末な事。軽く無視して正面に視線を

戻し、咳払いを一つ。

心持ちどん引きな気がしなくもない。しかし、これも戒李は無視した。

黒髪美女に笑顔を向けなおしつ、何か？ と問う。

「う、うむ。名乗りが遅れた。我が名は関羽、字は雲長。聞けばそちらは大所帯だとか。

その戦力、この戦いに貸してはもられないか？」

嫌な言葉に、思わず冷や汗が流れる。

どっちが嫌なんだ？ と首を捻り、どっちも嫌なんだと結論が来た。

落ち着け、落ち着くんのだ。今はそっちに突っ込んでる場合じゃない。回避すべき内容が含まれている。と、自身に言い聞かせ。

「お名前を、もう一度」

「ん？ ああ。姓は関、名を羽。字が雲長だ」

「今日ほど、世界の不条理が憎く感じた日はないな。あつ、よく考えたらこれ義兄弟まとめてご対面パターンじゃねえか！ 芋づるの悪夢!!」

浅く自身を抱いて、戒李は身悶えしながら唸る。

背後で威羅と璃撥が一步退くも、今の彼にとつては正直どうでもいい。

兵隊長の表情が歪み、関羽は短い悲鳴と共に肩を揺らす。

しかし、その中で御遣いだけが唯一違う反応をとっていた。疑うような表情で、開いた口から声を作る。

「ツンデレ最強」

「若いな。確かに一ジャンルとして強みのあるものではあるが、それだけが最強など傲慢もいいところだ。手始めに、近所の年上お姉さんが如何に素晴らしいかを理解すると

いい」

空気が凍った。

意味不明な言動に驚いたのと、意味が解るからこそ驚いたのと。その二種類の理由で、5人の時間が停止する。

起動状態の戒李は、このタイミングで逃げちゃ駄目かな？　とも思うが、これ以上追つ手を増やすと大陸中が敵だらけになりそうだと思いとどまった。

さてと言葉を前置きし、関羽へ向ける視線に感情はない。

「その申し出は断らせてもらおう。こちらは30余名の少数勢力、そちらが期待するような強兵でもない」

確かに戦える者が、自分を含めて4人はいる。だが、残り30名が素人に毛の生えた程度だ。

今後の訓練次第では変わってくるとしても、今の状態で戦地に出すのは自殺行為以外の何物でもないだろう。

気まぐれとは言え、救ったからにはそう易々と危険へ放り出すことも出来ない。

もしかすると情が移ったのかもしれないが、この場では深く考えないでおく。

頭から意識を追い出して、いやと否定の言葉を作った関羽を戒李は見た。

「今は少しでも戦力がほしい。その為の助力を——」

「ふう、ん。つまり、この街が助かるため、無関係な俺たちに巻き込まれると？」
「違う、我らには天がついているのだ。勝てる戦を、より確実とするため——」
「都合のいい言葉だなあ、天の御遣いつてのは。本人が無能でも、その名だけで自殺志願者が増えるわけだ」

口の端を歪めて、戒李は笑う。

2度 に渡る言葉の割り込み、且つ主が貶されて激昂する関羽の目の前であるというのに気にした様子もない。

貴様!! と吠える声に続くのは、黒髪を靡かせながら武器——青龍円月刀を構える動きだ。

兵隊長が、慌てたように手を伸ばすも届かない。

状況を理解できない御遣いは、彼女の姿を視認すらできていない。

そして、一息の内に迫る刃を理解しているはずの戒李ですら何もしない。

関羽の性格を考えれば死にはしないだろうが、間違いなく大怪我に繋がるだろう一撃を涼しげに見送っている。

これに反応して動いたのは2つの影だ。威羅と璃撥が、同時に腰から剣を抜いて円月刀の進路を塞ぐ。

重い金属音が響いた。

その4

あまり心地いいとは言えない音の反響に、酒屋の中にいる全員が振り向く。だが、それに構うことなく両者の視線はぶつかっている。

「威羅君も璃撥君も、よくやった。表彰ものだな」

「戒李殿。わざと人を怒らせるのは良いですけど、いつか首と胴が泣き別れますよ？」

なんなら、私がひと思いにやってさしあげましょうか？ 今！

「ちっ……お嬢の頼みさえなかつたら、今頃俺が後ろからばっさり」と

「ははは、俺も割と愛されてるなあ」

威羅と璃撥は何かを訴える様な視線を送るが、戒李はそれを気にしない。気にすることなく、防御は任せて喋る側へとまわる。

口を開こうとした瞬間、円月刀が少しこちらへと押し込まれた。

男2人が支える刃を、力でねじ伏せられる胆力は素直に驚きだ。

しかし、彼の口から漏れたのは感嘆ではない。喉を鳴らすような笑みの音である。

「おいおい、随分な猪武者だな。関羽雲長と言えば、素晴らしい武将だったと聞いているが。お前みたいのが指揮をしたんじゃ、死に兵が増えそうで何よりだよ」

失笑を含んだ挑発に、関羽の頭が更に加熱した。

今度こそ全力で、彼女の怒りが行動となる前に戒李は剣を抜く。

片刃で直刀の毒嚙。表面に刻まれた溝が、光を不思議な角度で乱反射していた。

警戒して一瞬の内に跳び退く関羽は、即座に構え直して再突撃の力を溜めている。だが、戒李はそれを気にもしない。

剣の切っ先を御遣いに向けて、そのまま口を開き。

「御遣い殿、一般教養の問題だ。お前は知っているだろう？ このまま放っておいても、

近い内に黄巾の乱など終わりを迎える」

「……やっぱり、あんたも俺と同じなのか」

「違うな。全く違う。お前の状況と、俺の状況は、まったくの、別物だ。だから問おう。同じ知識を持つものとして、まったく違う状況の者として」

一息。

両者の間に割り込もうとした関羽へ、大鉈を投げつけて制止させる。

そして、次の動きを生む前に言葉が続ける。

「貴様は、ただ愚か者か？ それとも、愚な英雄か？」

問う。

音が消えたような気がした。

驚きを持って見据える者、困惑を持って見守る者、見定めを持って注視する者。様々な思いはあれど、全ては音を失ったように動かない。

射抜く様な緋色の瞳は、闇を抱えてくすんだ色合いをしている。

真つ直ぐに視線を返してくる御遣いの眼を、眩しいなと評価しながら毒噛を床に突き立て。

続く動きで、催促の言葉を放つ。

「応えろよ、正義の味方」

まるで、子供を脅している様な気分戒李は内心で息を吐く。

実際、静かに恫喝しているのには違いない。これも、深く考えると厄介そうなので考えるのを早々に止めてしまう。

わざわざ、男のために気を遣ってやる事もない。

両手を突き立てた剣の柄の上で組み、仁王立ちの体制で待つこと10秒。斯くして、答えは来た。

俺は……と始まった言葉に、決意のような意志を感じる。

「俺は、きつと愚か者だろうけど。それでも、この街の皆を救いたいと思ってる」

「全部助けられるとでも？ 無茶言うな。戦おうが降伏しようが逃げようが、どこかで被害は出る。そういう考えすら出ないなら、今のうちにやめておけ」

「なら、少しでも多くの人を——」

「おいおい、頼むからあまりチープな言葉を吐かないでくれ正義の味方。まず、失う事を覚悟しろ。それから、悲しめない事も覚悟しろ。そして、その先にある何かを疑わない覚悟も必要だな。これが最低条件だ」

戒李の言葉に、御遣いは答ええない。否、答えられない。

正義感だけで何とかなるほど、この時代は甘くないんだ御遣い殿と論ず言葉にも無言が返ってくる。

食いしぼる歯から軋みの音が漏れ、全力で握られた拳は白くなっていた。

悔しいのだろう。だが、その悔しさだけで人を救うことなど叶うはずもない。

能力も、知力も、権力も、軍事力も。挙げていてはキリがないほど、彼には足りないものだらけだ。

「そうか。俺がこの世界に来たのは、たぶんお前のせいだな」

突き立てた毒嚙を引き抜き、切っ先を唸らせる勢いで御遣いに突きつける。

一度は去った脅威に晒されて、彼の顔はやや引きつり気味だ。

それでも、なんとか目は逸らさずに戒李を見据えている。

「かつての俺はできなかつた。だからこそ、お前と言う存在の対極として。きつと、お前の敵として俺はここにいます」

失うかもしれない覚悟と、そして得られるかもしれない覚悟を。

輝かしい未来だけを夢想することなんて、敵として許すわけにはいかない。

「腹を括れ、俺の敵。そうすれば、初回サービスで今回だけ協力してやる」
息を飲むような音がした。

それが誰の物かはわからないが、未だに空間は凍結している。

動けるのは僅かに2名。向かい合う戒李と御遣いだけだ。

2度、3度と何かを言い掛けては止めた彼を、くすんだ緋色は逃がさず見据える。

揺るがぬ意志を示すように、毒嚙の切っ先はびたりと止まって動かない。

「……わかった。腹を括る」

「まあ、言葉ではなんとでも言える。お前の行動を見て判断するでしょう」

吐息。

疲れた、と言わんばかりに深い息を戒李が吐き出す。毒嚙も、いつの間にか腰に収められていた。

肩から力を抜いて脱力する姿に、最早先程までの雰囲気はない。

関羽を挑発していた態度も、御遣いに恫喝とも取れる問いを放った姿勢も。既に虚空の彼方へ霧散し、気怠げにしている男が1人残るだけだ。

ああと思いついたように眩かれる言葉も、どこか面倒くさいそうなニュアンスが含ま

れている。

「最初にも言った通り、うちの莫迦どもは素人同然でな。この戦には参加させない。出るのはここにいる3人だけだが、威羅君は元軍人だし、十分だろう?」

問いながらも、戒李は答えを許さない。言外に、これ以上の譲歩はしないと匂わせている。

少し待つて特に反論が出ないのを確認すると、彼はすぐに動き出した。

拠点を移す伝言のため、璃撥の名前を軽く呼ぶ。

ついでに武器不足だということで、帰りに倉庫になつてゐる馬車も持つてくるよう指示した。

これから、ここらは戦場になる場所である。非戦闘員を、その近くでぶらつかせるのは危険でしかない。

ならば危険地帯からは放し、別の場所で合流するのがいいだろう。

とりあえず集合場所を洛陽に設定し、引き続き蘭芳に指揮も移譲しておく。あとはいくつかの決め事を言い含め、早馬よろしく璃撥を送り出した。

続いて、威羅にも戦いの準備をするよう指示を出す。

この街に、どれくらい正規兵が残つてゐるのか確認しなくてはならない。

伝令や分隊長の役を、その辺の素人にやらせればきつと悲惨な事になるだろう。ここ

だけは経験のある者を選抜する必要がある。

頭数が残っているのかという懸念はあるものの、足りない場合はどうにかするしかない。

人員の確認が終われば、次に不安なのは勇姿で集まった街の人間たちだ。

自分たちの街が危機に晒されているからと立ち上がってくれた彼らも、蓋を開ければ所詮は一般人でしかない。

急に戦場へ立たせれば、どうなるかは火を見るより明らかだろう。

せめて、殺し合いの基本だけでも教えられれば御の字だ。

欲を言うなら3人1組の連携をしてほしいが、流石にそこまでの期待は酷というものだ。いざ殺すとなった時に、身が竦まなければ十分である。

指示を聞いた威羅が、酒屋から急ぎ足で出て行くのを見届けながら。

(足りないだろうなあ)

このくらいで状況が好転するなら、最初から街は壊滅しなかつただろうと戒李は思う。

生き残るためには、更なる行動が必要だ。

仲間への連絡は璃撥に、人員関係は威羅にそれぞれ任せてある。

なら、と戒李は残っている物資の確認に動き出す。

食料に武具や防具、矢避けの盾もあると嬉しい。馬の頭数と、操れる人材は威羅に選抜させるのがいいだろうか。

ぶつぶつと必要な物を口の中で呟く戒李に、怪訝な表情なのは関羽だ。

先ほどまでの態度を、未だに警戒しているのだろう。

「俺は基本的に兵士だから、策を練るのは得意じゃない。その辺を任せたいが、良いんだよな？」 御遣い殿

「ああ、大丈夫だ」

力強い返事が、逆に不安を煽るのは偏見があるからだろう。

たぶん大丈夫と自分に言い聞かせながら、戒李も作業のために酒屋を出る。

考えるのは『久しぶり』の戦争についてだ。

敵の方が大規模なのは、おそらく確定事項だろう。となれば、今からでも用意できて確実に敵の戦力を削ぐ罨や道具が必要なる。

そんなに都合のいいものかとも思うが、不利を引つ繰り返すには考えるしかない。

機動力の事も考えると、運搬がしやすい物が最善だ。

「さて、これで戦略が『皆で力を合わせれば』とか『一騎当千の気持ちで挑めば』とかだったら敵前逃亡も視野に入れるか」

流石に無いと思うが。

出来る限り、彼らの戦略の幅を広げてやった方がいいのは事実だ。

軽く頷き、瓦礫の中にも使えそうなものが無いか探しつつ、戒李は頭を回し続けて歩き出す。